

我，弾劾す!!!

——作品と翻訳の間——

西 村 牧 夫

第1部：ゴリラと星の王子様

Le Gorille et Le Petit Prince

*Ah ! cette première affaire, elle est
un cauchemar, pour qui la connaît
dans ses détails vrais ! (É. Zola)]*

プロローグ

[...] *la vérité est en marche et rien ne l'arrêtera.* (É. Zola)

嘘野教授は近ごろ憂鬱である。妄想が昂じて、「大学人のデータ捏造，詐欺横領，学問的業績ゼロ，学歴詐称，盗作，研究費不正受給，アカハラ，セクハラ... アハハ，“Je suis amoureux !”とか吹聴する一方で論文指導を怠った奴もいる... あのかきは，見かねて俺が論文完成まで世話したっけ。ま，疑ったらきりが無いが，年齢的に俺を挟んだ形になる2人の同僚が10年ほど前に死んでしまったのも，単なる偶然かどうか... 墓巢村教授にいびられていたという噂もあるしな。本当に，この世の中，何が起るのか分からない」などと呟き，天を仰いだりしている。おのれの日常と周囲を顧みて，胸中，穏やかならざるものがあるのであろう。そんな時に院生から1通のメールが舞い込んだ。

*Au début, il n'y a donc, de leur part,
que de l'incurie et de l'inintelligence.* (É. Zola)

「歌詞訳をしていて、どうも時制にひっかかってしまったのでどうか、お返事願います。赤線を引いているところが、問題の箇所です。ピエール・バルーの“Ce n'est que de l'eau”（邦題：おいしい水）の歌詞です。下線部分は「障害が僕を邪魔させる時、僕は今朝それを避けて進んだ」？ 文法的解説をして頂けませんでしょうか？」

「障害が僕を邪魔させる時、僕は今朝それを避けて進んだ」という日本語はなかりと、いささか不機嫌になりながらも、かわいい院生のためだ、嘘野は添付書類を開いてみる。

Ce n'est que de l'eau

Pierre Barouh

Droit devant moi je cours les routes
 En vagabond de grands chemins
 Je fuis l'amour et ma dérouté
 Parfois je verse des pleurs sur mes jours anciens
 Ce n'est que de l'eau
 Ce n'est que de l'eau camarade
 Ce n'est que de l'eau...

Lorsque l'orage vient je goûte
 La terre qui se change en parfum
 Et si la pluie pèse ses gouttes
 Je chante auprès de mon arbre
 J'en attends la fin
 [*refrain*]

Quand un obstacle me dérouté
Je le contournais ce matin

C'est l'océan qui barre ma route
 Tant pis je vais le sauter
 Pour aller plus loin
 [*refrain*]

なるほど、現在時制中心のテキストに半過去が出てくる。学界の第一人者を自認する嘘野教授の得意分野だ。「どれどれ, Quand un obstacle me dérouté Je le **contournais** ce matin... なるほど, なるほど...」と言いながらも、嘘野の額に冷や汗がにじむ。フランス語文法のことなら大概のことは解決できると自負する自信満々の表情が、やがて、「ウーン！」という唸りとともに苦悶しはじめた。嘘野の自尊心をズタズタにした疑問が氷解したのは、実に3時間後のことであった（フランス語に自信のある人は、是非この謎解きに挑戦してもらいたい）。真相が分かったとき、猜疑心の強い嘘野は叫んだ。「これは俺を学問的に陥れようとする罠だ！」

その日の午後、62歳の嘘野が若い院生に対しアカハラまがいの言辞を連ねたのは言うまでもない。

*Vous, les cons naissants Les cons innocents Les jeun's cons
 Qui n'le niez pas Prenez les papas Pour des cons (G. Brassens)*

しかし、冷静に考えれば、これはフランス語教育におけるレベルの低下がもたらしたもので、かわいい院生に悪意があるわけではなかろう。嘘野のように年甲斐もなく怒り出すのは、フランス語教育に携わる自分自身に唾するようなものだ。

*Vous, les cons âgés Les cons usagés Les vieux cons
 Qui, confessez-le Prenez les p'tits bleus Pour des cons
 Méditez l'impartial message D'un type qui balance
 entre deux âges Le temps ne fait rien à l'affaire
 Quand on est con, on est con (G. Brassens)*

そういえば、某大学の大学院論集で, [...] en couchant avec une négres-

se, ils travaillent à promouvoir la cause des underdogs という仏文が「黒人女と寝ることは、負け犬の原因究明に役立っている」と訳されているのを見て、茫然自失した嘘野ではなかったか？ あの論文の引用仏文にはすべて同じようなレベルの日本語訳がつけられていたっけ！

それにしても、指導教授のお墨付きで発表されるはずの論文でさえこのてい तरらくであるから、今や絶望あるのみなのかもしれない。あるいは、仲間内のことであるからして、なれ合いということなのであろうか。

Ils ont laissé faire la sottise. [...] C'est un procès de famille, on est là entre soi, [...] (É. Zola)

日本における（英語を除く？）外国語教育の不幸は、おそらく大学院の博士課程レベルでも必ずしもまともな言語感覚が身につけていないことにあるだろう。言語感覚の欠如は、教室内での訳読はもとより、刊行された翻訳書に至るまで、どのような欠陥があろうとも分からないまま無批判に受け入れる体質を醸成する。そして、学生あるいは読者の批判にさらされない外国語教師・翻訳者は、唯我独尊、自らを疑うことなく怪しげな訳文を垂れ流す。

Quand une société en est là, elle tombe en décomposition. (É. Zola)

「その結果、嗚呼、その結果！…」と嘘野教授は、我にもあらず悲憤慷慨し、あたかも大聴衆を前にしたかのごとき興奮状態に入った。「学生・読者はますます無批判となり、外国語教師・翻訳者はますます自省する精神を失っていくのである！ 嗚呼、なんたる悪循環であることか！ 思い起こせば、我らが学生であった頃は、授業中、教師の解釈に疑義があれば、それは違うのではないかと、及ばずながら一太刀、二太刀、浴びせかけたものだったが…」いつしか、嘘野の眼には涙がにじんでいる。たまたま質問を抱えて研究室をのぞき込んだ学生が、あわてて目をそらし、薄気味悪そうに立ち去っていく。

やがて、ようやく平静を取り戻した嘘野は、次のごとき平々凡々たる結論に到達した。「これらの翻訳上の誤りは、要するに原作品に対する冒瀆ではなからうか…」こうして、時ならぬ義憤を感じて、嘘野はいくつかの作品について翻訳の詳しい検証を行う決意をしたのであった。

Mon devoir est de parler, je ne veux pas être complice. (É. Zola)

1. まずは小手調べ

——ネット上の「Le gorille」(Brassens) ——

*Telle est donc la simple vérité, monsieur
le Président, et elle est effroyable [...]* (É. Zola)

この年の最後の授業で、嘘野は Brassens の「Le gorille」を取り上げた。この詩の内容を教室で説明するのはやや問題かと思われたが、反骨心に富む反画一的な歌手が隠然たる支持を受け続けていることも、フランス精神の1つの表れであり、紹介する価値は十分あると考えたからだ。ところが、土壇場になって完全な録音が見つからず、ダウンロードの可能性を求めてネット上を探しまくることになった。その結果、入手に成功し、現在出回っている歌詞との相違も発見できたのだが、そのほかに2つの日本語訳の発見という思わぬ余録を得た。と同時に、インターネットという巨大な情報源によって、おそらく、無防備な者はますます虚偽の情報を植え付けられ、他方、上手に使える者はますます情報を蓄積するという情報格差社会を育てていくようにも思われた。

以下、ネット上で見つけた2つの訳と教室で嘘野がほぼ即興で披露した訳(フランス語との対訳形式で示す)を対照してみよう。

「Le gorille」は1952年に発表され放送禁止になるなど数々の反発を招いたシャンソンである。不当判決や死刑に対する批判の目はあるものの、女性や同性愛者にとっては不愉快な過激表現があることをお断りしておく。

また、ブラサンスは一般大衆から支持されているばかりでなく、知識人やエリート層からも圧倒的な支持を受け、さらには、多くのプロ歌手たちから尊敬されている歌手であり、単なる「おふざけ」ではないことも言うておかなければならない。多少オチャラカ番組的ではあったが、2005年3月と4月の2度に渡って放映された「*le plus grand Français de tous les temps*」のランキングを紹介しておこう。一般のフランス人が投票により、もっともフランスで偉大な人物を選ぶというものだが、ブラサンスはジュール・ヴェルヌやナポレオンを破り、堂々12位に入っている。

Le classement de la 1ère à la 30e place

1. Charles de Gaulle	11. Marcel Pagnol	21. Zinedine Zidane
2. Louis Pasteur	12. Georges Brassens	22. Charlemagne
3. Abbé Pierre	13. Fernandel	23. Lino Ventura
4. Marie Curie	14. Jean de la Fontaine	24. François Mitterrand
5. Coluche	15. Jules Verne	25. Gustave Eiffel
6. Victor Hugo	16. Napoléon Bonaparte	26. E. Zola
7. Bourvil	17. Louis de Funès	27. Soeur Emmanuelle
8. Molière	18. Jean Gabin	28. Jean Moulin
9. Jacques Yves Cousteau	19. Daniel Balavoine	29. Charles Aznavour
10. Edith Piaf	20. Serge Gainsbourg	30. Yves Montand

Le classement de la 31e à la 60e place

31. Jeanne D'Arc	41. Michel Platini	51. David Douillet
32. Général Leclerc	42. Jacques Chirac	52. Henri Salvador
33. Voltaire	43. Charles Trénet	53. Jean-Jacques Goldman
34. Johnny Hallyday	44. Georges Pompidou	54. Jean Jaurès
35. A. de Saint-Exupéry	45. Michel Sardou	55. Jean Marais
36. Claude François	46. Simone Signoret	56. Yannick Noah
37. Christian Cabrol	47. Haroun Tazieff	57. Albert Camus
38. Jean-Paul Belmondo	48. Jacques Prévert	58. Dalida
39. Jules Ferry	49. Eric Tabarly	59. Léon Zitrone
40. Louis Lumière	50. Louis XIV	60. Nicolas Hulot

Le classement de la 61e à la 90e place

61. Simone Veil	71. Jean-Jacques Rousseau	81. Raymond Poulidor
62. Alain Delon	72. Robespierre	82. Charles Baudelaire
63. Patrick Poivre d'Arvor	73. Renaud	83. Corneille
64. Aimé Jacquet	74. Bernard Kouchner	84. Arthur Rimbaud
65. Francis Cabrel	75. Claude Monet	85. Georges Clémenceau
66. Brigitte Bardot	76. Michel Serrault	86. Gilbert Bécaud
67. Guy de Maupassant	77. Pierre-Auguste Renoir	87. José Bové

68:Alexandre Dumas	78:Michel Drucker	88:Jean Ferrat
69:Honoré de Balzac	79:Raimu	89:Lionel Jospin
70:Paul Verlaine	80:Vercingetorix	90:Jean Cocteau

Le classement de la 91e à la 100e place

91:Luc Besson	92:Tino Rossi	93:Pierre de Coubertin
94:Jean Renoir	95:Gérard Philippe	96:Jean-Paul Sartre
97:Catherine Deneuve	98:Serge Reggiani	99:Gérard Depardieu
100:Françoise Dolto		

なお、この種の歌詞の翻訳を目くじら立てて批判するつもりはないが、以下、どう考えても不適當と思われる箇所には下線を施してある。

LE GORILLE

(Georges Brassens)

01 C'est à travers de larges grilles	でっかい柵の間から
02 Que les femelles du canton	そこらあたりの女ども
03 Contemplaient un puissant gorille,	屈強なゴリラを見つめてた
04 Sans souci du qu'en-dira-t-on	まるで人目もはばかりず
05 Avec impudeur, ces commères	恥知らずにも、この母ちゃん連中
06 Lorgnaient même un endroit précis	なんと、体の一部をジロジロ、ジロジロ
07 Que, rigoureusement ma mère	それがどこかは、きびしく、母さんに
08 M'a défendu d'nommer ici	ここで言っちゃいかんと言われてる...
09 Gare au gorille !	(さあ、みなさん)ゴリラにご用心!...

TANABE 氏訳

- 01 鉄格子のむこうから
02 田舎娘が
03 ごっついゴリラに見惚れちまって
04 ひとの噂も気にかへず。

奥地氏他訳

- 太い格子ごしに
土地の小母はんどもが
見つめていたのは逞しいゴリラ
何と言われようと気にもとめず

- 05 みだらに おしゃべり女が 恥ずかしがるどころかこのおかみさん達
 06 指をくわえて「あそこ」を見つめていた しかもある決まった一点に横目を使っていた
 07 厳しくママが口に出して言うては そこは僕の母さんがきびしく
 08 いけないといった「あそこ」を 口にするなど禁じてた場所
 09 ゴリラに気をつけろ！ ゴリラにご用心

左側の訳は Davide Yoshi TANABE 氏のもので、右側は奥地睦二・佐藤哲生・小川和洋の3氏による共訳である。両者のホームページへのアクセスは以下による：<http://davidyt.ld.infoseek.co.jp/log084.htm>,
http://www.7a.biglobe.ne.jp/~k_ogawa/

TANABE 氏はこの箇所に次のような注をつけている。

qu'en-dira-t-on 人のことをいうこと、つまり噂話、世評。*un endroit précis* 明瞭な場所だが、不定冠詞 *un* がついているので「あそこ」としてみた。

「不定冠詞 *un* がついているので「あそこ」としてみた」というのは、やや問題あり。不定冠詞は身体の部位の「1つ」であることを示しているに過ぎない。「ある明確な場所だが、どことは言わない」という意図が働いている。「あそこ」はその部位を特定したことになるので文法的には誤訳である。ただし、翻訳としては問題なかろう。嘘野も囲みのように「体の一部」とのみ訳し、*précis* は訳出していない。

- 10 Tout à coup, la prison bien close しっかり閉まってたはずなのに
 11 Où vivait le bel animal イケメン猿が暮らしてた檻
 12 S'ouvre on n'sait pourquoi (je suppose どういうわけだか、突然、開く、(たぶん、
 13 Qu'on avait dû la fermer mal) 閉め方が悪かった?)
 14 Le singe, en sortant de sa cage さて、雄ザル、檻を出てのたまった。
 15 Dit « c'est aujourd'hui que j'le perds » 「きょうは、あれを失う日！」
 16 Il parlait de son pucelage サルが話していたのは、童貞のこと。
 17 Vous aviez deviné, j'espère そりゃ、みなさん方、先刻承知！

- 18 Gare au gorille ! (さあ、みなさん) ゴリラにご用心! ...
- 10 いつか畜生が住んでいた そのハンサムなゴリラが住んでいる
- 11 ムシヨの扉が開く 閉まっていた檻が
- 12 どうしてかは知らないが 多分 うまく閉まってなかったのか
- 13 うまく閉まっていなかったに違いない。 突然開いて
- 14 猿は、檻から出ながら言いはなつ ゴリラが檻を出ながら
- 15 「今日こそ俺は それをなくしまおう」 今日ではあれを失くしまおうかと言った
- 16 猿は 己の童貞のことを言ったのだ あれとは童貞のことらしい
- 17 みなさん お分かりになったと思うけど! 皆さんのお察しどころ
- 18 Gare au gorille !

下線部にやや問題があるもののみあまの翻訳と思われる。

語学的には、「今、種明かしをしたけれど、それがなくても分かっていたでしょ」という17行目の大過去 (aviez deviné) に注目しておこう。また、le bel animal を嘘野は囲みのように「イケメン猿」と訳したが、実際は、顔だけでなく「全体が立派で見事な動物」ということであろう。

- 19 L'patron de la ménagerie 動物園の園長さん、
- 20 Criait, éperdu : « Nom de nom ! あわてふためき喚いてた。「ありゃりゃ!
- 21 C'est assommant car le gorille とんでもないことになりおった。なにしろ
- 22 N'a jamais connu de guenon » ゴリラは雌ザル知らず!
- 23 Dès que la féminine engeance さあ、ところで女ども、
- 24 Sut que le singe était puceau サルが未経験と知ったとたん、
- 25 Au lieu de profiter de la chance おいしい話に飛びつくと思いきや
- 26 Elle fit feu des deux fuseaux 尻に火がついたように逃げ出した!
- 27 Gare au gorille ! (さあ、みなさん) ゴリラにご用心! ...
- 19 動物園のパトロン 飼い主の親爺が
- 20 叫び狂って「こん畜生め! 取り乱して叫んだ

- 21 こいつはへまだ ゴリラはまだ こりゃまた 困ったこった
 22 雌を知らないんだぞ! だってこのお猿さん
 23 いかがわしい女が まだ雌を知らんのだから
 24 知ったら 猿が童貞だと、 女どもはゴリラが童貞なのを知るやいなや
 25 チャンスを利用する代わりに、 絶好のチャンスに見切りをつけて
 26 女は二本の紡錘の炎を燃やした! あたふたと駆け出した
 27 *Gare au gorille!*
- 28 Celles-là même qui, naguère ほんのさっき、ギラギラした目で
 29 Le couvaient d'un oeil décidé サルを見つめていた女どもさえ、
 30 Furent, **prouvant** qu'ell's n'avaient guère どんどん逃げる... ということは、母ちゃん
 31 De la suite dans les idées 連中、頭の中がハチャメチャ、ってこと
 32 D'autant plus vaine était leur crainte そんなに怖がるのは思い過ごし、
 33 Que le gorille est un luron なにしろ、ゴリラはすごい奴
 34 Supérieur à l'homme dans l'étreinte 愛戯にかけては、男より、とてもお上手
 35 Bien des femmes vous le diront 証言してくれる女は、ごまんといるよ
 36 *Gare au gorille!* (さあ、みなさん) ゴリラにご用心!...
- 28 少し前まで 彼奴を欲しそうに ついさっきまで特に物欲しげな目付きで
 29 眺めていた女たちが 奴を見ていた女どもまで
 30 逃げ出した 彼女らの言う 妄想はもうこれっきりと逃げ出した
 31 ことはメチャメチャだ で彼女等の気がかりは
 32 くだらないほど心配で ファイになったわけ
 33 抱けば ゴリラは ゴリラの抱きしめ方は
 34 男より陽気なやつだと 人間の男よりずっとすごいとか何とか
 35 女たちはそう言うだろう! それは女達がメシより好きな話
 36 *Gare au gorille!*

27行目まではまあ日本における翻訳の平均レベルと言ってもいいが、28-35行の訳は、両方ともかなりひどい。TANABE氏はこの箇所に必要な正直

な注をつけている。

avoir de la suite dans les idées で「考えに一貫性がある」、*d'autant plus vaine était leur crainte* の節の上手い解決ができなかった。

確かに、この1節には右側の共訳のほうも手こずっているようだ。問題は30行目の結果あるいは説明を示す現在分詞 (*prouvant*) の用法であろう。「物欲しげにしていたのに逃げ出すとは、女たちの考えに一貫性が欠如していることの証明だ」という単純な論理だが、2つの翻訳はかなりもたついている印象を与える。

32-34行目は「(未経験のゴリラが相手では何をされるか分からないという) 女たちの恐れは根拠がない、人間の男どもよりはゴリラのほうがはるかに床上手なのであるから」という意味。2つの翻訳は完全に読み間違いをしていると言えよう。

しかし、何よりも問題なのは、35行目との連携で、「(ゴリラが閨房の技術にたけていると) 女どもが言うだろう」とは、「多くの女がゴリラとの性体験がある」ということである。このあたり、女たちの貞操観念の欠如や性への執着への痛烈な当てこすりが見られるのだが、2つの翻訳ではまったく欠落している。

- | | | |
|----|--------------------------------------|------------------------|
| 37 | Tout le monde se précipite | (ところが) みんな、一目散 |
| 38 | Hors d'atteinte du singe en rut | さかりのついた雄ザルに捕まったら大変と。 |
| 39 | Sauf une vieille décrépite | 残されたのが、よぼよぼ婆さんと |
| 40 | Et un jeune juge en bois brut | まだまだ未熟な青二才の判事さん。 |
| 41 | Voyant que toutes se dérobent | 女はみんな「ごめんなさい」。それを見 |
| 42 | Le quadrumane accéléra | 見た四つ足ゴリラ君、「おい、待て」と |
| 43 | Son dandinement vers les robes | 身体を左右に揺らし、ばばあと判事の |
| 44 | De la vieille et du magistrat | マキシドレスを追いかける。 |
| 45 | Gare au gorille ! | (さあ、みなさん) ゴリラにご用心! ... |

- 37 ひとり老婆と無骨な みんな逃げ出して
 38 若い判事を除いて さかりのついたゴリラを避けたのだが
 39 みんなが急ぐ サカリの よぼよぼ婆さんと
 40 ついた猿から逃れようと、 若い判事だけが森の中で
 41 みんなが逃げる みんなが逃げるのを見ていた
 42 四足は老婆のきものや するとこの霊長類は
 43 法服に向かって肩を 身体をゆさぶりながら
 44 いからせ体を揺らす 婆さんと司法官に迫ってきた
 45 *Gare au gorille !*

この翻訳はほぼ問題ないと思われる。ただ、ここでも現在分詞（41行目：*Voyant*）が分かっていない。主節の前に出た現在分詞は説明・理由を示し、「女たちがみんな逃げ出したのを見てとって、ゴリラは残された2人に向かって急いだ」となる。

- 46 «Bah ! soupirait la centenaire 「おやまあ！」とため息ついた百歳婆さん、
 47 Qu'on puisse encore me désirer 「こんなあたしでよかったら、
 48 ***Ce serait extraordinaire*** そりゃ、ま、ありそうにはないけれど
 49 Et, pour tout dire, inespéré» できるもんなら、願ってもない幸せ！」
 50 Le juge pensait, impassible 判事は動じず、考える
 51 «Qu'on me prenne pour une guenon 「僕を雌ザルと間違える？…
 52 C'est complètement impossible» ないない、ないない、それはない…」
 53 La suite lui prouva que non ところがどっこい、事件の結末は…
 54 Gare au gorille ! （さあ、みなさん）ゴリラにご用心！…
- 46 「まゝ」と百にもなる婆さんが まさか と百歳婆さんはため息をついた
 47 ため息をついた「私ってまだ こんなわたしに気があるなんて
 48 魅力があるかしら、それは これはただごとじゃない
 49 素敵ね、ほんと、それは意外だわ」 滅相もない
 50 判事さんは考えた、無感動に 判事は判事でたかをくくって

- 51 「僕を雌猿と取り違えるなんて 私を雌猿の代わりにするなんて
 52 絶対ありえない」やがて判事さん それは全く有り得ないこと
 53 にも違う ありうるんだってわかった! ところが結果は彼の思わくとは逆
 54 *Gare au gorille !*

左側52-53行目の Tanabe 氏の訳は、恐らく入力ミスであろうか、意味不明である。ちなみに、53行目の意味は「その後に生じたことが、そうではないということ

を判事に証明した」である。
 また、47行目の *puisse* は録音では接続法半過去 *pût* が使われている。ブラサンスが古典的文法に則った言葉遣いをしているのに対し、現在では接続法半過去がほぼ死滅し、現在形で書き改められているのかもしれない。

ここでは、日本人が軽視しがちな条件法の罣があることを指摘しておこう。嘘野がことあるごとに繰り返す、論文にも書いたことだが、条件法によって立つ基盤は「事態成立の否定」である。しかし、「とりあえず通じればいい」という原理無視のフランス語教育においては、条件法は「何となく肯定」なのである。上の2つの翻訳、「それは素敵ね」/「これはただごとじゃない」と単なる肯定文になっている。これでは、「まさか!」という老婆の半信半疑の心情が伝わってこない。ここは、囲みの嘘野訳のように「ありそうにはないけれど」という断りを入れるのが正解となる。

- 55 Supposez que l'un de vous puisse être さーて、お聞きのみなさんよ、もしも、
 56 Comme le singe, obligé de このサルと同様（強姦するとして）
 57 Violer un juge ou une ancêtre 判事かばああの二択問題、
 58 Lequel choisirait-il des deux ? さーて、どちらを選ぶかな？
 59 Qu'une alternative pareille こんな選択、したくもないが
 60 **Un de ces quatre jours**, m'échoie いつの日か、運命のいたずらに出会ったら
 61 C'est, j'en suis convaincu, la vieille そりゃ言うまでもなく、婆ちゃんです
 62 Qui sera l'objet de mon choix この私めが選ぶのは！
 63 Gare au gorille ! (さあ、みなさん) グリラにご用心! ...

- 55 もしもあなたが、この猿のように、 もしあなたがこのゴリラのように
 56 判事さんか老婆を犯さなければ 判事か婆さんを
 57 ならないとしたら、 犯すとしたら
 58 どちらを選びます？ 二人のどちらを選ぶだろう
 59 こんな選択、 同じ選択を
 60 この四日のうちに期限が来て 四日以内に迫られたら
 61 それはきっと老婆 僕が選ぶ相手は
 62 彼女が僕の選択！ きっと彼女の方だったろう
 63 *Gare au gorille !*

いずれの翻訳も、Un de ces quatre joursという何の変哲もない表現につまずいているのが意外だが、これも日本という外国語教師天国・翻訳者天国ならではの現象であろう。

[...] *qui montre avec quel esprit superficiel on avait étudié...*
 (Zola)

Eh oui ! d'un côté, des enseignants incompetents, de l'autre, des étudiants dépourvus de motivation et, peut-être, pas très intelligents... Comment voulez-vous qu'ils apprennent quoi que ce soit ? (Usono)

- 64 Mais, par malheur, si le gorille ところが、不運はあるもので、ゴリラが
 65 Aux jeux de l'amour vaut son prix 愛の戯れに期待どおりの強者でも、
 66 On sait qu'en revanche il ne brille みなさん、ご存じ、反対に
 67 Ni par le goût, ni par l'esprit 趣味や知性はまるでダメ
 68 Lors, au lieu d'opter pour la vieille 誰だって婆ちゃんを選ぶだろう、
 69 Comme **aurait fait** n'importe qui と思いきや、なんと
 70 Il saisit le juge à l'oreille 判事の耳をむんずと掴み
 71 Et l'entraîna dans un maquis あたりの茂みに引きずり込んだ
 72 *Gare au gorille !* (さあ、みなさん)ゴリラにご用心！...

- 64 だが、不幸にして、もしゴリラが けれど困ったことにこのゴリラは
 65 愛の戯れに価値があるならば あのほうのテクニックは凄そうだが
 66 反対にセンスもエスプリも そのわりに好みと思入れは
 67 目立たない。 一筋縄では行かぬ性癖のほうで
 68 そのとき、老婆をとらないで この際婆さんには目もくれず
 69 誰だろうとそれをやっていたら、 行き当たりばったり
 70 判事を捕まえて 判事の耳たぶひっ掴まえて
 71 マキの仲間に引き入れる! 森の茂みへ連れ込んだ
 72 Gare au gorille !

それにしても、69行目の翻訳はどうだろうか!?! およそ翻訳を志す人の解釈とは思えないが、ここでも条件法の罠にはまったのであろうか。条件法であるから、「仮に同じ状況におかれたとしたら」と反現実仮定条件を設定しなければならない。そうすれば、「誰しものがそうしたであろうように（老婆を選ぶ）」という解釈が自然に出てくるはずだが...

- 73 La suite serait délectable 興味津々、続きをお聞かせしたいは
 74 Malheureusement, je ne peux 山々なれど、申し訳ない、できません
 75 Pas la dire, et c'est regrettable 話せないのは、まことに残念、
 76 Ça nous aurait fait rire un peu 実を言え。これが、けっこう笑える話で。
 77 Car le juge, au moment suprême というのも、この判事、いまわの際に
 78 Criait : « Maman », pleurait beaucoup 「母ちゃん!」と叫び、さめざめ泣いた
 79 Comme l'homme auquel le jour même (実は) この日、判事は男をひとり
 80 Il avait fait trancher le cou ギロチンにかけたのだが、その男も（「母
 ちゃん!」と叫び、さめざめ泣いたとか...）
 81 Gare au gorille ! (さあ、みなさん) ゴリラにご用心!...
- 73 続きは心地よいに違いない、 結果は愉快なことに相成るのだが
 74 不幸にして、僕は続きを、 残念ながら
 75 言えない 残念だけど、 申し上げかねる

- 76 そいつはちょっと僕らを笑わせたらうに； ただ一寸笑わせるのは
 77 というのは判事さん、絶頂の時に、 その間際にあの判事野郎
 78 叫ぶんだ「ママ！」って泣き喚く、 母さんと泣き喚いたそう
 79 まるで首をちょん切られる まるでその日 自分が縛り首にした
 80 日の男のように 男そっくりに
 81 *Gare au gorille !*

TANABE 氏はよほど正直な人なのであろう、最後に次のような感想を述べている。

この詩は相当に難しい。正直よく分からなかった。放送禁止になったというのは分かるような気がする。ま、学生の間圧倒的な支持を得ていた歌手であった。僕は一度だけ北アフリカの劇場でブラッサンスをライブで聞くことができた。当時の僕には、歌詞の意味が十分につかめず、ブラッサンスの真価は残念ながら分かりえなかった。

Le temps ne fait rien à l'affaire Quand on est con, on est con

(G. Brassens)

それにしても、最後の部分で (79-80行目) 実はその同じ日に、判事が1人の男をギロチンにかけていたことが明らかになるのだが、そのあたりの解釈が曖昧で、この詩の隠れたテーマである裁判への不信 (ゴリラの本性を見抜けなかった判事) や死刑に対する嫌悪などがぼやけてしまったことは残念である。嘘野はこの部分を説明的に訳しているが、やむを得ないところであろう。

ここまで書いてきて、嘘野はうつろな眼で天を仰いだ。その昔「一億総 idiots 化」を声高に言いつのった評論家がいたが、今も変わらないのかもしれない。変わらないどころか、インターネットなる情報流通の化け物が跳梁する今、「idiots 化」は当時とは比べものにならないぐらいのスピードで進行しているのであろう。仮に、ブラッサンスという少々変わった歌手に興味を抱いた日本人が出てきたとして、彼がフランス語を知らない場合、どうなるか？ 彼がまっ

とうな言語感覚の持ち主であるならば，上記2つの翻訳を前にして，早々にブラサンスに愛想づかしをするであろう。あるいはまた，彼が今日の言語貧困化に毒されていれば，訳も分からずおもしろがって，さらに欠陥だらけの情報の輪を押し広げることであろう。どちらに転んでも，何という不幸，何という虚しさであろうか…

J'accuse [...] d'avoir été l'ouvrier diabolique de l'erreur [...]

(É. Zola)

2. 「星の王子さま」の中の複合過去と単純過去

嘘野はフランス語文法の専門家である。なるべく「ふつうのフランス語」に，しかも「外から」，接するようにしている。フランス語はあくまで考察対象なのである。したがって，避けるべきは，一方で詩的言語，韻文などであり，他方で francophones ではない「外国人のフランス語」である。完全主義者の嘘野は日本人の書いたフランス語の文は可能な限り読まないことにしている。また，やむをえない場合を除いて自らフランス語で書くこともしない。

今回，ブラサンスを扱ったのは，そういう意味で禁を破ったことになるが，楽しい息抜きではあった。

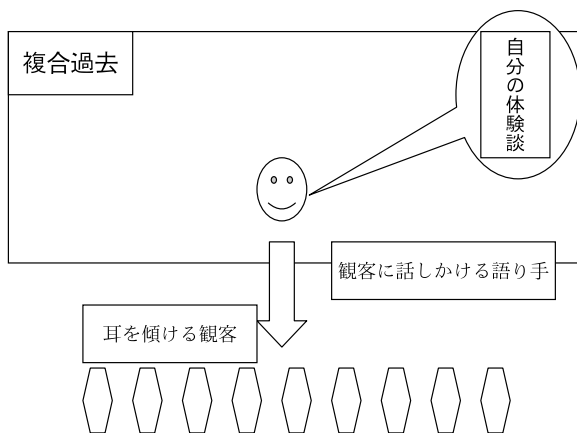
しかし，やはり，中核はあくまで「ふつうのフランス語」である。そこで選んだのが Saint-Exupéry の «Le Petit Prince»... 理由は単純で，恐らく日本で一番広く読まれているフランス語からの翻訳作品であろうから，また，昨年から今年にかけて 10冊ほどの新訳が世に問われたから，である。また，フランス語学の観点からは，このいかにも単純そうな物語が意外にも素人には手に負えないほどの複雑な構造をもっているからでもある。たとえば…

2 a 複合過去と単純過去

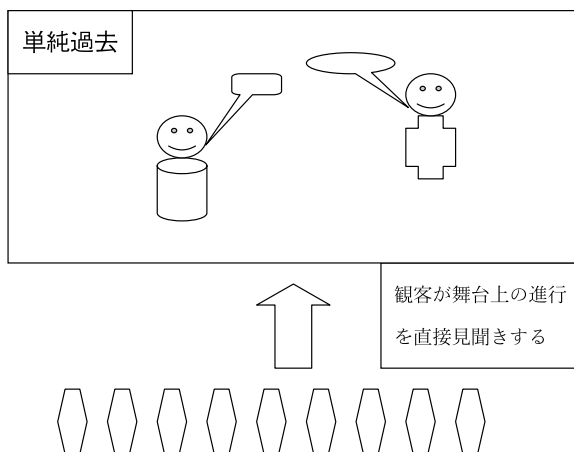
恐らく，内藤訳のみならず，新訳もすべて，完全に見落としているのが，作品中の複合過去と単純過去の使い分けであろう。ここでは，フランス語学を専門としていない人のために説明を思い切って単純化してみる。

何らかの過去の出来事を語る場合に複合過去が使われると，聞き手は常に話し手を目の前にしている。出来事はあくまで話し手の言葉を通して想像するし

かないのである。これを演劇空間にたとえて図示してみよう。舞台上には語り手がいるのみで、演技する役者たちの姿はない。観客には語り手の声が響くだけということになる。もちろん、言葉を通してどのような出来事が起こったかを知ることができるし、その内容は実は単純過去で語られても何ら変わるころはないのだが、情報の伝わり方という観点からすれば両者は大きく異なる。



では、複合過去ではなく単純過去を使用するとどうなるかと言えば、語り手は舞台上から消え、観客は下図のように、直接、舞台上の役者の動きを見、セリフを聞くことになる。



このように複合過去と単純過去は、理論上、歴然たる違いがあり、このことから過去に関する情報提供に様々な陰影をつけることができる。また、上図のように「語り」においては初めから視点設定がなされている。ところで、「語り」においてもまた半過去が多用される。その場合、いったいどこへ視点移動するというのであろうか。ここに至って「半過去を使用すると視点移動が生じる」といった俗耳に入りやすい粗雑な説明はあらかじめ効力を失うことになるが、ここでは深く立ち入らないことにする。

ただ、上の図で示したように、単純過去を使用した場合には語り手の介入がなくなり、聞き手（読者）は直接出来事の進行に立ち会うことから、現在形が単純過去に変わって多用されることもまた自明の成り行きである、とのみ述べておこう。

2 b «Le Petit Prince» の中の実例

では、「Le Petit Prince」では複合過去と単純過去がどのように現れ。どのように翻訳されているかを、第1章と第26章から数行を抜き出して考察してみよう（カッコ内は内藤訳〔岩波、1972年〕におけるページを示す）。

(イ) *J'ai* alors beaucoup *réfléchi* sur les aventures de la jungle et, à mon tour, *j'ai réussi*, avec un crayon de couleur à tracer mon premier dessin.

ぼくは、それを読んで、ジャングルのなかでは、いったい、どんなことがおこるのだろうと、いろいろ考えてみました。そして、そのあげく、こんどは、色エンピツで、ぼくのはじめての絵を、しゅびよくかきあげました。

(7-8)

(ロ) Lorsque je *revins* de mon travail, le lendemain soir, *j'aperçus* de loin mon petit prince assis là-haut, les jambes pendantes. Et je *l'entendis* qui parlait:

井戸のそばには、古いこわれた石垣がありました。あくる日の夕方、ぼくが仕事からもどってくると、ぼくの王子さまが、こわれた石垣の上に、両足をぶらりとたれて、腰をおろしているのが、遠くから見えました。する

と、こういつている王子さまの聲がきこえました。(114)

説明するまでもないが、仏文（イ）と（ロ）の間には複合過去と単純過去という異なる時制形が使用されている。しかし、日本語訳にその違いはまったく表出されていない。これは、句読点の配置からも分かるように日本語訳の文体にきわめて意識的に推敲された跡が見られるだけに、驚くべきことであると云わねばならない。

「いや、驚くことはない、こんなもんかも知れないぞ」と嘘野は考える。学生はもとより教師でさえ、翻訳といえばフランス語と日本語の間に単語と単語の対応を見出せればそれでこと足りるいうところがありはしないだろうか。名詞限定辞、時制形、条件法、接続法、現在分詞、ジェロンディフ... 語学の専門家にとっては極めて美味であるもろもろの使い分けがほとんど味わってもらえないとなれば、おおかたの作品解釈は味盲者がご馳走を食して能書きをたれるのと同様ということになる。もちろん、一部勤勉なる研究者は francophones の手になる研究書や解説書を読み漁っているであろうから、大筋のところでは心配なからう。しかし、複合過去と単純過去という明白かつ単純な使い分けさえも無視されているという現象に、嘘野はなにか嘘ら寒いものを感じるのである。10冊ほどの新訳すべてを事細かに検証したわけではないが、おそらくは代わり映えしないものであろう

このように原文にありながら、訳文にはまったく浮かび上がってこないことがある。あるいはさらに罪深いことには、表面的な名訳の裏に信じられないような誤訳が隠されていることもある。たとえば、カミュの『転落』やミシュレの『民衆』は嘘野が愛読した書の1つだが、その翻訳の一部は思い出すだけに吐き気を催す体のものであった。なぜか？ それは、一見、まことにそれらしい、敢えて言うならば、見事な訳文と評価してもどこからも文句が出てこないような日本語になっていながら、原文とは正反対の解釈になってしまっているからだ。ブラサンスの翻訳で見たような、およそまともな言語感覚のあるものから見れば未熟としか言いようのない日本語のほうが、読者に警戒心を抱かせるといって意味でまだしも罪が軽いというものだ。当然のことながら、「稚拙な詐欺」はわずかな警戒心で回避できるわけで、詐欺というのは巧妙であればあるほど

危険なのである。

まあ、このように嘘野がムキになって言いつのっても判断力のない者たちは、ただただ呆然とするのみであろう。そこで、挑発するのだが、フランス語に自信があるというあなた、以下の対訳の不備をどれだけ指摘できるか、やってみていただこう。そうすれば、少なくとも、あなたが大学のフランス語教師としてふさわしい読解力を備えているかどうかのテストにはなるだろう。

La Chute

PUIS-JE, monsieur, vous proposer mes services, sans risquer d'être importun? Je crains que vous ne sachiez vous faire entendre de l'estimable gorille qui préside aux destinées de cet établissement. Il ne parle, en effet, que le hollandais. À moins que vous ne m'autorisiez à plaider votre cause, il ne devinera pas que vous désirez du genièvre. Voilà, j'ose espérer qu'il m'a compris; ce hochement de tête doit signifier qu'il se rend à mes arguments. Il y va, en effet, il se hâte, avec une sage lenteur. Vous avez de la chance, il n'a pas grogné. Quand il refuse de servir, un grognement lui suffit: personne n'insiste. Etre roi de ses humeurs, c'est le privilège des grands animaux. Mais je me retire, monsieur, heureux de vous avoir obligé. Je vous remercie et j'accepterais si j'étais sûr de ne pas jouer les fâcheux. Vous êtes trop bon. J'installerai donc mon verre auprès du vôtre.

もしもし、ご迷惑じゃなければ、お手伝いしたいと思えますが

この酒場を切り廻しているあのりっぱなゴリラ氏には、あなたの言葉が通じますまい。なにしろ、オランダ語しか話さん男ですから。わたしに弁護させてくださらないかぎり、あなたの注文がジンだということも、主人には分かりませんよ。

さあ、通じましたよ、ああやってうなずいているでしょ、あれはわたしの言葉が分った証拠なんですな。ほら、果たしてあっちへ行きましたよ、手早いけれども悠々としていて慌てません。あなたは連が好い、主人のやつ、ぶつぶつ言わなかったでしょう。給仕をするのがいやなときは、ぶつぶつ文句を言うだけでおしまい、誰がなんと言ってもだめなんです。自分の気持ちを支配する、これは高等動物の特権ですな。では失礼します、お役に立って結構でした。これはどうも恐縮です、お受けしましょう、お邪魔でなければ。あなたはぜひぶん親切ですな。ではひとつ、わたしの杯をあなたのそばに置きましょう。

Servitudes du Paysan

Si nous voulons connaître la pensée intime, la passion du paysan de France, cela est fort aisé. Promenons-nous le dimanche dans la campagne, suivons-le. Le voilà qui s'en va là-bas devant nous.

Il est deux heures; sa femme est à vèpres; il est endimanché; je réponds qu'il va voir sa maîtresse. Quelle maîtresse? sa terre.

Je ne dis pas qu'il y aille tout droit. Non, il est libre ce jour-là, il est maître d'y aller ou de n'y pas aller. N'y va-t-il pas assez tous les jours de la semaine?... Aussi, il se détourne, il va ailleurs, il a affaire ailleurs... Et pourtant, il y va.

Il est vrai qu'il passait bien près; c'était une occasion. Il la regarde, mais apparemment il n'y entrera pas; qu'y ferait-il?...

Et pourtant il y entre.

この2つのテキストは、嘘野が院生の実力試しに時々使っているものだが、未だかつてクリアした学生はいない。ある年度の最初の授業を再現してみよう。

「まず、La Chuteの出だしの *Puis-je, monsieur, vous proposer mes services, sans risquer d'être importun?* が“もしもし、ご迷惑じゃなければ、お手伝いしたいと思いますか”と訳されているが、これでいいかね？」

「問題ないと思います」

もし私たちがフランスの農民の心に秘められた思いや情熱を知りたいと思ったら、ごくなんでもなことだ。日曜日に田舎へ散歩にいて、農民のあとを追いかけてみればよいのである。私たちの前をあっちの方に出かけていく農夫が見える。

今は2時。彼の妻は午後の祈りに出かけている。そして彼は着飾っている。恋人に会いに行くところだから私は答えよう。いったいどんな恋人になのか？彼の土地になのだ。

だが、まっすぐ行くわけではない。そうだ。この日、彼は自由なのである。行くことも行かないこともできるのである。週日には毎日そこに行っていたではないか... それゆえ彼は道を変える。他の場所に行こうというのだ。他に用事があるのだから... だがやっぱり彼は自分の土地に行く。

本当にごく近くまで行ってみる。良い機会なのだから。彼は自分の土地を眺めているが、見たところ足を踏み入れそうにもない。いったい何をしようというのか...

いややっぱりそこに入って行く。

「うん、まあ、こんなものかな。しかし、ここにはすでにこの小説の本質を示す表現があるのだが、なんだと思う？」

「...」

「形容詞の *importun* だよ。この1節の最後には *fâcheux* の形で繰り返されている。小説をちゃんと読んでいけば、すぐにピンと来そうなものだが...つまり、この“*je*”で表される男、異国の酒場でいきなり話しかけてきた男だがね、いかにも“*importun (fâcheux)*”でないように見せかけて、その実、最後まで“*importun (fâcheux)*”な存在としてつきまとうわけ。この“しつこくまとわりついて煩わしい思いをさせる”というのは、なかなか日本語には訳しにくいね。

いずれにしても、あくまでも“*importun (fâcheux)*”ではないと見せかけなのが、この男の戦術だということが分からないと、翻訳者のようにこのテキストで致命的な誤訳をしてしまうことになるんだ。[中略]

ところで、*Il y va, en effet [...]* が“ほら、果たしてあっちへ行きましたよ”というのは、どうだろう？」

「*aller* と組み合わせられていますから、“そこへ行く”ということですね」

「じゃ、いったい、どこに行くんだ？」

「...」

「狭い酒場で“(マスターが) あっちへ行きました”はないだろう！では、ヒントをあげよう。— *Allez, on va se mettre à peindre les murs. — O.K., on y va.* とか *Elle connaît plein de vieilles chansons folkloriques, et chaque fois qu'elle peut en chanter une, elle y va de bon coeur.* とか言うときの *y aller* というのは...? どこかに行くわけじゃなかろうね？」

「なるほど、“ペンキを塗る”、“フォークソングを歌う”ってことですかね」

「そう。だから、このテキストでは“注文のドリンクを用意する”になる。ま、単に“ほらほら、作り始めましたよ”ぐらいに訳しておくとするか...

さて、いよいよ問題の箇所だが...話しかけてきた男は、お役ご免とばかりあっさり引き下がるふりをする。*Mais je me retire, monsieur, heureux de vous avoir obligé.* “では失礼します、お役に立って結構でした。”は、これでいいね？」

「はい」

「では, Je vous remercie et j'accepterais si j'étais sûr de ne pas jouer les fâcheux. の訳は？」

「これはどうも恐縮です, お受けしましょう, お邪魔でなければ”でいいと思いますが」

「accepterais は条件法だよ。“お受けしましょう”にはならん！」

「はああ？」

「条件法は否定だと常々言ってるじゃないか！」

「だって, 先生, Je voudrais boire un café. と言ったら, コーヒーが飲みたいわけでしょう？ それがどうして否定なんですか？」

「馬鹿者！ それは条件法の最もマージナルな用法なんだ。だいたい, 会話中心の教育方法が悪い！ 二言目には Je voudrais..., Je voudrais... と言っておって！」

(嘘野教授は自分がマージナルであることを棚に上げて, 現在のフランス語教育のあり方に八つ当たりしはじめ, 院生は付き合いきれないというようにため息をつく)

「だって, 先生, バスやタクシーに乗っていて降りたくなったら, 運転手さんに “Monsieur, je voudrais descendre ici.” と言うでしょう？ それって降りたくないんですか？」

「バカモン！バカモン！」(やりこめられて, 嘘野はますます激昂する)

「お店で Je voudrais un panda en peluche. とか, 郵便局で Je voudrais envoyer ce paquet à Tokyo. とか言えないとしたら, そもそも日常生活が不可能になりますよ」

「余計なことは言わなくてよろしい。要するにだ, 金を貸してくれと言われて, 断るときは Je voudrais bien (, mais je suis à sec)., 正直に言えないときは Je voudrais dire la vérité (, mais je ne peux pas)..., つまり “NO” ということだ。どうだ, 否定じゃないか！」

「...」

「本題に戻ろう。男が j'accepterais si j'étais sûr de ne pas jouer les fâcheux と言っているのは, “お受けしたいところですが, ご迷惑になりかねませ

んから...”と一応引いてみせたわけだ。あくまでも、相手に“ぜひお願いします”と言わせるための戦術なのさ」

「でも、J'installerai donc mon verre auprès du vôtre.と言っているのですから、一緒に飲むことに合意したのだと思いますが」

「いや、その前に Vous êtes trop bon.があるだろ。これは、相手が“ぜひとも一献差し上げたい”とさらにしつこく誘った（つまり、まんまと男の罠にはまった）ことを示している。文学やってるんなら、ちゃんと行間を読まなきゃいかんよ。したがって、ここは“(そこまでおっしゃるのですか)これは恐れ入ります。では(お言葉に甘えて)グラスを酌み交わすことにしましょう”と訳すところなんだ。男はいろいろ話して相手を後ろめたい気持ちにさせようと企んでいるのだが、そうなることを望んだのはあくまで相手のほうだ、ということにしたいわけさ」

(嘘野は「どうだ。参ったか」とそっくりかえったが、院生は「こいつ、いつも訳が分からないことばかり言いやがって」と柳に風という風情である。いささかムツとした嘘野であったが、もう1つのテキストも手短かにコメントしておかねばならない。まあ、これも学生泣かせのテキストだから、嘘野としてもいじめがいがあるといものだ)

「では、ミシュレのテキストに移ろう。段落2の訳は何かおかしいと思わないかい? 常識的に考えて」

「...」

「だって、誰も聞いてもいないのに je répons qu'il va voir sa maîtresse “恋人に会いに行くところだからと私は答えよう”はないだろう」

「別にいいんじゃないですか?」

「馬鹿者! この場合の répondre は“答える”じゃなくて、“保証する”だ。要するに、“きっと、あの男は愛人に会いに行くところなのだ”という訳になる。大学院にまで来て、そんなことも分かんのか!」

「でも、先生、どちらの訳を採用しても大した違いはないと思いますけど」

(嘘野は危うく脳卒中の発作を起こしそうになった。しかし、まだ授業時間は残っている。とりあえず我慢だ。しかし、細かいことには目をつぶって、決定的な間違いを指摘しなければならぬ)

「では聞か、Il est vrai qu'il *passait* bien près; *c'était* une occasion.“本
当にごく近くまで行ってみる。良い機会なのだから”の半過去はどうだ？」

「...」

（「半過去」の話題が出ると嘘野が異様に興奮するというのは、学会でも有名
な話だ。まして、日常的に嘘野の奇矯さを目の当たりにしている院生である。
運命に呪われた自分がただひたすら悲しい、いとおいしい、と心を閉ざす）

「君には分からんだろうが、この半過去は過去ではない！」

「はあ!?!?」

「これは断じて過去ではない!“通りかかった”だけで、まだ“通り過ぎて
いない”ではないか！それがどうして過去なんだ！」

（「そんなこと知るもんか」と言いたげにしていた院生、とつぜん目が覚めた
ように）

「でも、先生、そんなに興奮することありませんよ。だって、翻訳者も現在
形で訳してますから」

「バカモン！バカモン！（意表を突かれて、嘘野はますます激昂する）現在
形でも、訳が間違っているだろうが、訳が！ここはな、“こんなに近くを通り
かかったので、せっかくだから自分の土地を眺めているのだ”と訳すんだよ。
どうだい、*c'était une occasion.*を“せっかくだから”と訳すところなんかは
ちょっとした名人芸だぜ」

（「プッ」と吹き出しそうになるのをこらえて、下を向く院生。何も気がつか
ず悦にいる嘘野）

「せっかくだから言うが、*mais apparemment il n'y entrera pas; qu'y
ferait-il?...*を“彼は自分の土地を眺めているが、見たところ足を踏み入れ
そうにもない。いったい何をしようというのか...”という訳も無茶苦茶だ！」

「なるほど、条件法ですね」と分からぬままに、院生は調子を合わせる。

「その通り。天下の嘘野に師事していると、さすがに目の付けどころが違う
...」

「...」

「つまり、ここはこう訳すんだ：“どうやら足を踏み入れそうにもない。だっ
て、（仮に入ったとして）何をすることがあろうか（いや、何もすることはな

いではないか)”...」

「要するに、条件法は否定ですね」

「す、すごい、何という理解力だ！君はこのS学院で20年に1人という逸材だ！...」

かつて取り組み、結局、途中放棄した「翻訳論」の断片を思い出し、嘘野は思わぬ脱線をしてしまった。気を取り直して、「Le Petit Prince」における複合過去と単純過去について私案を提示しておこう。

2 c 「発話」と「語り」：訳し分け私案

序文を見ても、「Le Petit Prince」が少なくとも名目上、子供たちに向けたものであることには疑いないであろう。サンテグジュペリは、この本が1人の大人に捧げられたことを子供たちにしきりに詫びているのだから、本来は子供たちのために書いたと見るのが自然であり、ここでは、実質的に大人向けか子供向けかという不毛な議論には立ち入らないことにする。

ところで、本文中には次のように読者に直接語りかける表現が散見される。

- (1) *Alors vous* imaginez ma surprise, [...] quand une drôle de petite voix m'a réveillé. (ch.2)
- (2) *Vous* imaginez combien j'avais pu être intrigué [...] (ch.2)
- (3) Si je *vous ai* raconté ces détails [...] (ch.4)
- (4) *Vous vous* demanderez peut-être: [...] (ch.5)
- (5) Pour *vous* donner une idée des dimensions de la Terre, je *vous* dirai [...] (ch.16)
- (6) Je n'*ai* pas *été* très honnête en *vous* parlant des allumeurs de réverbères. (ch.17)
- (7) *Regardez* le ciel. *Demandez-vous*: le mouton oui ou non a-t-il mangé la fleur? (ch.27)

このことから、「Le Petit Prince」の語りでは、常に読者（聞き手）である

vous の存在が意識されていると言うことができる。そして、次の例から、この vous は「大人たち」と対立したもの、すなわち「子供たち」を表すこともまた明らかであろう。

(8) *Les grandes personnes* aiment les chiffres. Quand *vous leur* parlez d'un nouvel ami, *elles ne vous* questionnent jamais sur l'essentiel. (ch.4)

(9) *Les grandes personnes*, bien sûr, ne vous croiront pas. (ch.17)

さらに、例(1), (3), (6)から、このような「語りかけ」は複合過去と当然ながら相性がいいことも明らかであろう。

だとすれば、複合過去主体の部分はどう訳すかについては、自ずから答えが出てくるであろう。それは、複合過去と単純過去に対応する時制体系をもたない日本語に移し替える際の、もちろん、1つの方便ではあるのだが、次のように若い男性が子供たちに話しかける文体ということになるだろう。

(イ) そこでね、僕はジャングルで起こる様々な出来事についてあれこれ考えてみたんだ。そして、僕もやってみようと、色鉛筆を使って生まれて初めての絵を首尾よく描き上げたというわけ。

これに対し、単純過去主体の部分については従来の訳し方で問題なかろう。「です・ます」体にするか、「である」体にするか、選択の余地はあるが、ここでは内藤路線を踏襲するのがよいと考える。ただし、もう1つ問題がある。すなわち、「je」が複合過去との関連では *ici et maintenant* の「発話者」(tu, vous と対立)であるのに対して、単純過去との関連では「語りの中の登場人物」(tu, vous と対立しない)であるという問題である。この相違を際立たすために私案では「僕」と「私」のように訳して分けてみた。

(ロ) あくる日の夕方、私が修理の仕事から戻ってくると、遠くから、王子がその上(石堀の上)に両脚をぶらりとたれて座っているのが見えました。

そして、王子がこう話しているのが耳に入りました。

ただし、作品中、「発話者」の“je”と「登場人物」の“je”が錯綜することがあり、その都度、原則を無視して自然な流れを尊重せざるを得ないであろう。

3. 「星の王子さま」の翻訳を検証する

以下、「Le Petit Prince」の内藤訳を順を追って調べてみよう。フランス語原文と日本語訳に続き試訳 / コメントが添えてある。試訳は → で示す。

3 a 第1-3章（翻訳：p.7-19）

第1章は聞き手に直接語りかける『僕の思い出話』であり、「発話者」の“je”と複合過去が主体である。これについては、上記（2c）イのような文体で書き直す必要があるが、ここでは割愛する。

第2章：『僕の思い出話』 + 『私と王子の物語』[2重構造の章]（複合過去 + 単純過去）

この章は、ためらいつつ「思い出」から「語り」に移行するという、語学的にはきわめて興味深いテキストになっているが、これについては、いずれ別の機会に説明したい。

1. — S'il vous plaît... dessine-moi un mouton ! //「ね... ヒツジの絵をかいて!」(p.11)

→ 「すみませんが... ヒツジの絵を描いてくれる!」

vouvoisement と tutoiement が同居している。このような表現や「ヒツジの絵を描け」という要求が、おそらく、王子をあまりに「幼い子供」として印象づけてしまっていると思われる。しかし、このときすでに王子は見聞遍歴を終えているのであるから、精神的には成年に達していると言ってよいのではないだろうか。いずれにせよ、この砂漠での出会いの時点で、王子は死を覚悟しており、その死への旅立ちの準備の一環としてヒツジの絵を必要としていることを忘れてはなるまい。

2. J'ai sauté sur mes pieds comme si j'avais été frappé par la foudre. / 僕はびっくり仰天して、飛び上がりました。 (p.12)

→ まるでもういきなり雷が落ちてきたみたいで、僕は思わず飛び起きた。

おそらく、なぜこれが悪訳の例としてあげられたのか、いぶかしく思う向きもあろう。もちろん、嘘野としても、sur mes piedsがあるから「起きる」でなければならないなどと細かいことを言うつもりはないのである。「飛び上がった」だろうが「飛び起きた」だろうがかまわない場合もあるだろう。

ただ、もう少し前の部分を見て欲しい。

Le premier soir je *me suis donc endormi* sur le sable [...]

[...] une drôle de petite voix *m'a réveillé*.

sauter sur mes piedsする前の「僕」は「寝ていた」のである。寝ている人が「飛び上がる」とは修行を積んだ行者の空中浮遊か、はたまた超常現象か？

これは、細野が常々「外国語読解時の視野狭窄現象」（外国語のテキストを読んでいると、つい一点集中的になり前後関係を忘れてしまう）の1例かも知れない。

3. Aussi absurde que cela me semblât à mille milles de tous les endroits habités et en danger de mort, je sortis de ma poche une feuille de papier et un stylographe. / 人が住んでいるどんどころからも千マイルも離れていて、それに、いつ死ぬかしのところ
で、ヒツジの絵をかくなるととてもばかばかしい気もしましたが、ぼく
はポケットから1枚の紙と万年筆を取り出しました。 (p.12)

→ 人里からはるかに離れたところで死の危険にさらされているというのに、ばかばかしいと思いつつも...

全体を見ると内藤訳はよく推敲された日本語になっていると思うが、ここは

ややもたつき気味。

- 4.[...] je dis au petit bonhomme (avec un peu de *mauvaise humeur*) que je ne savais pas dessiner. / そこで、その坊ちゃんに (少しむっとしながら) 絵は描けないと言いました。(p.13)
→ そこで、男の子に (少し不機嫌に) 絵は苦手なんだと言いました。

「絵は描けない」という日本語は曖昧。

5. — Tu vois bien... ce n'est pas un mouton, c'est un bélier. Il a des cornes... / 「そうだな... これ、あたりまえのヒツジじゃなくて ツノが生えてるもの。」(p.14)
→ あのさ、これって、ほら... ただのヒツジじゃなくて、雄のヒツジだろ。ツノが生えてるもの...

恐らく、Tu vois bienには「ほらほら、分かって欲しいな」のような相手を教諭するようなニュアンスがありそうだが...

6. Et je lançai : — Ça c'est la caisse. Le mouton que tu veux est dedans. Mais je fus bien surpris de voir s'illuminer le visage de mon jeune jugé: / そして、それを投げ出すように、ぼっちゃんに見せました。「こいつぁ箱だよ。あんたのほしいヒツジ、その中にいるよ」ぶっきらぼうにそう言いましたが、見るとぼっちゃんの顔がぱっと明るくなったので、僕はひどく面食らいました。(p.15)
→ そして、はき出すようにこう言ってやりました。「ほら、箱だよ。君の欲しがってるヒツジはこの中さ」するとこの口うるさい男の子の顔が輝いたので、私はびっくりしました。

lancer を本来の意味の「ものを投げる」ととっているのはただけない。勘違いであろうが、きわめて初歩的なミスである。

意地悪く解釈すれば、内藤訳の「こいつぁ箱だ」はフランス語の *c'est une caisse* に相当する。定冠詞 *la caisse* は認知フレーム理論で説明すると、1匹のヒツジがいることになっている以上、同じ認知フレーム内にある定名詞句「箱」はそのヒツジとの関連においてのみ意味解釈を受ける。つまり、「ヒツジが暮らす箱」または「ヒツジを運ぶ箱」ということだが、無理をして日本語に訳出する必要はなかろう。

内藤訳は *jeu* をあっさり「ぼっちゃん」としているが、これまでの王子とのやりとりとうんざりした「私」の気持ちは表現したいところだ。

7. — *Ça suffira sûrement. Je t'ai donné un tout petit mouton. / 「そんな心配いらぬよ。だから、僕、ほんのちっぽけなヒツジ、かいたんだ」* (p.15)

→ 「それでもきつと大丈夫さ。とっても小さなヒツジを入れたから」

原文を素直に訳せばそれですむものを、わざわざ別の表現（「心配いらぬ」）をあてることはなかろう。また、「だから」は論理的にやや問題ありか。複合過去 *ai donné* はここでは相対時制で、なぜ「十分だ」と言えるのかの理由づけとなっている。

第3章：『私と王子の物語』（単純過去主体）

8. *Et j'étais fier de lui apprendre que je volais. Alors il s'écria: — Comment ! tu es tombé du ciel ! — Oui, fis-je modestement. — Ah ! ça c'est drôle !... / 僕は鼻を高くしながら、鳥のように飛べる人間だと言ってやりました。すると、王子様は大声をあげて言いました。*

「なんだって！君、天から落ちてきたんだね？」「そうだよ」と僕はしおらしい顔をして言いました。「へええ！変だなあ、そりゃ...」 (p.16)

→ （こんなふうには）自分は空を飛べるんだぞと彼に言ってやって、私は得意になっていたわけです。[...]「なんだって！君、空から落ちてきたのか！[...] へええ！そりゃ笑っちゃうな...」

もちろん、この翻訳もフランス語を知らない者から見れば、なぜいけないのか不思議に思われることであろう。しかし、フランス語学の立場からすると、半過去は単純過去形や複合時制形と違って「出来事の成立」を表しえない。内藤訳のように「言った」と解釈するのは不可能なのである。

おそらくこのように説明されても語学的思考経験がないものには、なかなか理解できないであろう。

要するに、内藤訳では、「私」はまず *Ce n'est pas une chose. Ça vole. C'est un avion. C'est mon avion.* と言った後で、さらに得意そうに「僕は空を飛べるんだぜ *Je vole*」と2度目の発言をしたことになってしまう。しかし、フランス語では、*Ce n'est pas une chose. Ça vole. C'est un avion. C'est mon avion (= Je vole)* という唯一の発言があるのみなのである。そして、この半過去を含む文は、その発言をしたときの「私」の心理状態を説明しているにすぎない。

嘘野が常々言っているように、文の意味には冠詞や時制などの文法的部分も含まれるのだが、日本人のフランス語文解釈からは文法的部分がしばしば欠落してしまう。

さて、非専門家には難解な説明が続いたので、単純ミスの指摘で締めくくろう。

drôle を「変だ」と訳すのは相当に初歩的な間違い。王子には「変だな」と疑う人の悪さはない。たまたま出会った人間が自分と似たような境遇なのだと思うって、おかしくてつい笑ってしまったのだ。

9. Et le petit prince eut un très joli éclat de rire qui m'irrita beaucoup. Je *désire* que l'on prenne mes malheurs au sérieux. / 王子様はそう言って、たいそうかわいい声で笑いました。笑われた僕はとても腹が立ちました。天から落ちるなんてありがたくないことですから、真剣に考えてもらいたかったのです。 (p.17)

→ そう言って王子が朗らかな笑い声を響かせたので、私はとてもいやな気分になりました。不幸な目にあったときは真剣に受け止めてもらいたいからです。

désire が現在形である以上、この場合だけのことではなく、超時的なこととして理解せざるを得ない。このように、francophones が無意識に読み取るところを、日本人はまったく読んでいないことが多い。

10. J'entrevis aussitôt une lueur, dans le mystère de sa présence, et j'interrogeai brusquement: — Tu viens donc d'une autre planète? / そのとたん、王子様の夢のような姿がぼうっと光ったような気がしました。僕は息を弾ませて聞きました。「じゃあ、あんたはどこかほかの星から来たんだね？」 (p.17)

→ この言葉を聞いたとたん、私は王子がなぜこんなところにいるのかという謎に一条の光を見い出し、いきなりこう尋ねました。「つまり、君はどこか別の星からやって来たってということ？」

ここにも視野狭窄の症状が見られる。この場合、王子の言葉 (Alors, toi aussi tu viens du ciel ! De quelle planète es-tu?) がヒントになり、「私」は謎の解決の糸口を求めて質問 (Tu viens donc d'une autre planète?) したのだから、試訳の解釈しかありえない。しかし、いったん mystère と lumière に神経を集中させてしまうと、原文とはほど遠いミステリアスな幻想場面が浮き上がってくる。(日本人の神秘的解釈好みについては、本論集の『星の王子様』にある訳例199のコメントを参照)

11. Il hochait la tête doucement tout en regardant mon avion: — C'est vrai que, là-dessus, tu ne peux pas venir de bien loin... / [王子様は] 僕の飛行機を見ながら、静かに首を振っています。「そうか、じゃ、そう遠くから来たわけでもないな....」 (p.17)

→ 飛行機を見ながら、[王子は] 静かにうなずいています。「なるほど、こんなのに乗ってきたんじゃ、そう遠くから来れるわけないね」

dessus は基本的には〈前置詞+代名詞〉であることを忘れてはなるまい、したがって、là-dessus は sur celui-là (= sur ce machin-là, sur cet avion-

là) である。

12. Vous imaginez combien j'avais pu être intrigué par cette demi-confiance sur “les autres planètes.” Je m'efforçai donc d'en savoir plus long: / どうやら「どこかほかの星」のことを言ってるらしい王子様の口ぶりに、僕はどんなに釣り込まれたことでしょう。で、そのことをもっと詳しく知ろうとしました。(p.17)

→ (君たちにも分かってもらえるよね，“地球以外の惑星”を知っているみたいなこの言いかたに僕がどんなにか興味を引かれたか) ... そんなわけで私は“地球以外の惑星”についてもっと知ろうとしたわけです。

ここには「語り手 (= 発話者 “je”)」の「語り」への闖入とよばれる現象が見られるが、試訳は啓蒙の目的でそれを原則に忠実に処理している。ただし、成功していると言いきるつもりはない。

13. — Ce qui est bien, avec la caisse que tu m'as donnée, c'est que, la nuit, ça lui servira de maison. / 「ああ、よかった。君のくれた箱があるんで、夜になったら、これ、ヒツジの家になるよ」(p.18)

→ 「君がくれた箱のいいところは、夜、ヒツジの家として使えることだね」

文法的には誤訳だが... それに、まあ、原文では王子の理屈っぽい性格が窺われるので、試訳のように忠実に訳したほうがよいと思われる。

14. — Mais si tu ne l'attaches pas, il ira n'importe où, et il se perdra. / 「でも、つないでおかないと、どこへでも行っちゃまうよ。迷子になってさ...」

→ 「[...] でたために歩いて行って、しまいに迷子になっちゃうよ」

3 b 第4-6章 (翻訳: p.20-32)

第4章: 直接聞き手に語りかける章 (複合過去, 現在形, 未来形)

15. Heureusement pour la réputation de l'astéroïde B 612 un dictateur turc imposa à son peuple, sous peine de mort, de s'habiller à l'Européenne. / さいわい, B-612番の星の評判を傷つけまいというので, トルコのある王様がを着ないと死刑にするというお触れを下しました。 (p.21)

→ 「小惑星 B-612にとって幸いなことにね, トルコの王様が, 死刑にするぞと脅して, 人民にヨーロッパ風の服装を強制したんだ」

副詞のかかり方が問題。もちろん, 誤訳というほどのものではない。ただ, 原文に忠実に訳して支障がないのだから, わざわざ「間違えて訳す」ことはなからう。ちなみに, 試訳では原文にある la réputation de を訳出していない。日本語の文脈においては不必要であるからだ。

16. Qand vous leur parlez d'un nouvel ami, elles ne vous questionnent jamais sur l'essentiel. / 新しくできた友達の話をするとき, 大人の方は肝心かなめことは聞きません。 (p.21)

→ 「新しくできた友達の話を話してあげても, 大人たちって, いちばん大事なことについてはぜんぜん質問してこないんだよね」

フランス語原文では, 次のようにメッセージの発信者と受信者の関係が明白:

vous → parler → eux // eux → questionner → vous.

試訳ではこの関係を明確に示した。日本語にある「～してやる」vs「～してもらう」や「(相手のほうから)～してくる」という表現手段を活用しない手はない。

17. Ainsi, si vous leur dites, “La preuve que le petit prince a existé c’est qu’il était ravissant, qu’il riait, et qu’il voulait un mouton. Quand on veut un mouton, c’est la preuve qu’on existe” elles hausseront les épaules et vous traiteront d’enfant ! / そんなわけですから、「王子様はほんとに素敵な人だった。ニコニコしていた。ヒツジをほしがっていた。それが王子様がこの世にいた証拠だ」などと言ったら、大人たちはあきれた顔をして、「ふん、君は子供だな」と言うでしょう。(p.22)

→ だから、「王子が存在していた証拠にね、彼はとても素敵で、笑ったり、ヒツジを欲しがったりしていたんだ。(だって) ヒツジを欲しがって、この世に存在している証拠でしょ」などと大人たちに言ったりしたら、(まさに) 子供扱いされてしまうわけだ。

18. Mais, bien sûr, nous qui comprenons la vie, nous nous moquons bien des numéros ! / だけれど、僕たちには、ものそのもの、ことそのことが大切ですから、もちろん番号なんかどうでもいいのです。 (p.23)

→ 「でもね、生きていくってことがどういうことか分かってる僕たちには、もちろん、番号なんて知ったこっちゃないよね！」

comprendre la vieを「ものそのもの、ことそのことが大切だと思う」と訳すのは、なかなか大胆で、そこに内藤訳の高い志を見ることもできよう。しかし、ふつうにあっさり訳したほうがいいのではないか。

19. J’aurais aimé commencer cette histoire à la façon des contes de fées. / 僕はこの話をおとぎ話みたいに始めたかったのです。 (p.22)

→ (本当はね) この話をおとぎ話風に始めたかったんだ (けどね)。

条件法である以上、実際はそうはいかなかったというニュアンスを出さなければいけない。

20. Pour ceux qui comprennent la vie, ça aurait eu l'air beaucoup plus vrai. / こうすると、ものそのもの、ことそのことを大切にする人には話がもつもつと本当らしくなったでしように。(p.23)

→ こんな風にしたら、生きていくってことがどういうことか分かってる人たちにとっては、よっぽど現実味が出たはずなんだ。

21. C'est triste d'oublier un ami. Tout le monde *n'a pas eu* un ami. / 友達を忘れるというのは悲しいことです。だれもが友達らしい友達を持っているわけではありません。(p.23)

→ (本当の) 友達ができた経験なんて、みんながみんな、してるわけじゃないからね。

やはり複合過去のニュアンスを活かしたい。

22. C'est dur de se remettre au dessin, *à mon âge*, quand on n'a jamais fait d'autres tentatives [...] ! / [...] ほかにはなんの絵も描いたことのない僕が、今この年になってまた絵を書くのはななかなかのことです。(p.23-24)

→ ほかに何も描いたことない者が、僕の年齢でまた絵を始めるっていうのは、(けっこう) 大変なんだ。

この文は一般論（主語：on，現在形，複合過去）。個別の事柄と一般論をごちゃごちゃにしてしまうというのも，翻訳書によく見られる欠陥ではなからうか。

23. Je *me tromperai* enfin sur certains détails plus importants. Mais ça, *il faudra* me le pardonner. Mon ami ne donnait jamais d'explications. / さいごに、僕はもつと大切なことで見当違いしそうです。でも、その点はなんとか大目に見ていただきましよう。僕の

友達の王子様はくどくどと説明してくれなかったのです。(p.24)

→ 結局のところ、もっと重要な部分で間違ったりするかもしれないね。でも、それは勘弁して欲しいな。(なにしろ)この友達はぜんぜん説明というものをしてくれなかったんだから。

フランス語では文と文の間の論理関係を、極力、まさにその内容だけで表すのに対し、日本語では文末に「だから」、「だけど」、「なのに」など明瞭な形を添えて誤解のないようにするのがふつう。

第5章：『私と王子の物語』 + 『聞き手への語りかけ』 [2重構造の章] (単純過去，複合過去)

24. Chaque jour *j'apprenais* quelque chose sur la planète, [...]. Ça *venait* tout doucement, au hasard des réflexions. C'est ainsi que, le troisième jour, je *connus* le drame des baobabs. Cette fois-ci encore ce fut grâce au mouton, car brusquement le petit prince m'interrogea, comme pris d'un doute grave: [...] / 日ごとに僕は王子様の星の [...] ことなどをなんということもなく知るようになりました。行き当たりばったりに考えているうちに、自然、話が分かってきたのです。そんなわけで、僕は3日目に恐ろしいバオバブの話を聞きました。そういうことになったのもやっぱりヒツジのおかげでした。というのは王子様がひどく心配そうな顔をして藪から棒にこう聞いたからです。(p.25)

→ 私は、星の [...] ことなどについて、毎日、何か (少しずつ) 知っていったのでした。(王子が) ポロッと口にする言葉から、ゆっくりゆっくり、分かってきたのです。たとえば、バオバブについての深刻な話を聞いたのは3日目のことです。このときもまたヒツジがきっかけでした。というも、何か重大な心配事ができたかのように、いきなり、王子がこんな質問をしたのです。

au hasard des réflexions の réflexions にはいろいろな意味があり、たとえば「(光や音波などの) 反射の偶然のままに」という解釈さえも不可能ではない。いずれにしても、嘘野は内藤訳の「行き当たりばったりに考えているうちに」という読み方はまったくしていなかった。反射的にこれが誤訳だと彼に思わせたのは、いわゆる bon sens というやつだろう。何らかの手がかりがないかぎり、いくら考えても、王子の星について分かることなど永久にあり得ないではないか!

したがって、嘘野の自然な解釈は「王子がポロッと口にする言葉から」であったのだが、この読みがおそらく正しいことは、第6章の J'ai appris ce détail nouveau, le quatrième jour au matin, quand tu m'as dit: [...] とか、第7章の Le cinquième jour, toujours grâce au mouton, ce secret de la vie du petit prince me fut révélé. Il me demanda avec brusquerie, [...] — Un mouton, s'il mange les arbustes, il mange aussi les fleurs? でも明らかであろう。明らかに「私」は王子のこのような片々たる発言や質問の端々から、王子にまつわる諸々を再構築しているのである。

25. Mais il remarqua avec sagesse: — **Les** baobabs, avant de grandir, ça commence par être petit. — C'est exact ! Mais pourquoi veux-tu que tes moutons mangent les petits baobabs? Il me répondit: "Ben ! Voyons !" comme s'il s'agissait là d'une évidence. / それから、分別くさく言いました。「大きなバオバブも、始めは小さかったんだよ」「そのとおりだ。でも、なぜ小さいバオバブなんか食べさせたいの、ヒツジに?」「分からないかなあ、そのわけ!」と王子様はさも分かりきったことのように言いました。(p.26)

→ でも、こんな賢いことも言うのです。「バオバブだって、初めはちっちゃくて、それから大きくなるんだよ」「そのとおりだね! でも、なぜヒツジに小さいバオバブを食べて欲しいのかな?」(すると,)“おいおい、何てこと聞くんない”とまるで言うまでもないと言いたげな返事が返ってきました。

26. Mais s'il s'agit d'une mauvaise plante, il faut arracher la plante aussitôt, dès qu'on a su la reconnaître. / だけれど、それが目につき次第、すぐに抜きとってしまわなければなりません。 (p.27)

→ しかし、悪い草木だったら、見分けがつき次第、抜き取る必要があるのです。

27. Le sol de la planète en était infesté. Or un baobab, si l'on s'y prend trop tard, on ne peut jamais plus s'en débarrasser. / そして、星の地面はその種の毒気に当てられていました。バオバブというものは早く追い払わないと、もうどうしても根絶やしするわけにゆかなくなるものです。 (p.27)

→ (王子の) 星の土壌にはその種が至る所にありました。ところで、バオバブというのは、ぐずぐずしているともう絶対に追い出すことができなくなるのです。

28. Quand on a terminé sa toilette du matin, il faut faire soigneusement la toilette de la planète. / 朝のお化粧がすんだら、念入りに星のお化粧しなくちゃいけない。 (p.28)

→ 朝(起きて)、顔を洗ったらさ、念入りに星の世話をしてやらなきゃいけないんだ。

言うまでもないことだが、この文は一般論で、onは「人々全般」を指す。しかし、王子のことにしても、人一般のことにしても、「化粧をする」ことはありえないのでは？

29. C'est un travail très ennuyeux, mais très facile. / 「[...] とてもめんどくさい仕事だけど、なに、ぞうさもいよ」 (p.28)

→ とても面倒くさい仕事なんだ、仕事自体はとても簡単だけだね。

「面倒くさい」のに「造作もない」ことはありえない。

30. J'ai connu une planète, habitée par un paresseux. Il **avait négligé** trois arbustes..." Et, sur les indications du petit prince, **j'ai dessiné cette planète-là.** / 僕は怠け者がひとり住んでた星を知っているけどね。その人はまだ小さいからといって、バオバブの木を3本放りっぱなしにしておいたものだから...」僕は王子様に教えてもらってその星の絵をかきました。(p.28)

→ 「[...] 怠け者の住む星に行ったことがあるんだけど、その怠け者が3本の小さな木（の処理）を怠けたためにね...」

そこで、僕は王子の説明どおりにその惑星の絵を描いたんだ。

31. Je dis: "Enfants ! Faites attention aux baobabs !" / こう言いましょう。「おーい、みんな、バオバブに気をつけるんだぞ！」(p.29)

→ 僕は（はっきり）言うよ、「おーい、子供たち！バオバブには気をつけるんだよ！」ってね。

32. C'est pour avertir mes amis d'un danger qu'ils frôlaient depuis longtemps, comme moi-même, sans le connaître, que j'ai **tant travaillé** ce dessin-là. La leçon que je donnais en valait la peine. / 僕がここにバオバブの絵をかいたのも、僕の友人たちが僕と同じように、もう長いこと知らないで危ない目にあいかけているので、気をつけるんだよ！と言いたいためです。僕はこの絵をたいへん苦勞してかきました。それでも、この教訓が無駄にならないようでしたら、僕は満足です。(p.29)

→ 僕がこの絵をこんなに一生懸命描いたのは、友人たちに危険を知らせるためなんだ。友人たちは、僕と同じで、ずっと前からそれとは知らずに危険にさらされてきたんだからね。この絵に込められている意味を伝えるためだから、苦勞のしがいもあったというものさ。

内藤訳はまだるっこしいので、整理してみた。それにしても、どうして en valait la peine が「僕は満足です」になるのやら？

第6章：「僕」が王子に直接呼びかける章（複合過去主体）

33. Ah ! petit prince, j'ai compris, peu à peu, ainsi, ta *petite vie mélancolique*. / 王子様、あなたは晴れ晴れしない日々を送ってこられたようだが、僕にはそのわけがだんだん分かってきました。(p.31)

→ (そうだったよね) 小さな王子君！ 僕にはこんな風にして少しずつ、君のささやかな、もの悲しい人生のことが分かってきたんだ。

34. Et tu m'as dit : — Je me crois toujours chez moi ! / [...] あなたはこう言いましたね。「僕、いつも、自分のうちにいるような気ばかりしてるんだ」(p.33)

→ そして君はこう言った。「僕ったら、今でも (つい) 自分の家にいるみたいな気になっちゃうんだよね！」

内藤訳のような解釈も可能だし、日本語としても間違いはないが、しかし、*toujours* は「相変わらず」の意味にとるほうが自然であろう...

35. — Un jour, j'ai vu le soleil se coucher quarante-quatre fois ! Et un peu plus tard tu ajoutais: — Tu sais... quand on est telle-ment triste on aime les couchers de soleil... — Le jour des quarante-quatre fois tu étais donc tellement triste? Mais le petit prince ne répondit pas. / 「僕、いつか、日の入りを43度も見たっけ」そして、少したって、あなたはまたこうも言いましたね。「だって.... 悲しいときって、入日が好きになるものだろ....」「1日に43度も入日を眺めるなんて、あんたはずいぶん悲しかったんだね?」しかし、王子様はなんとも言いませんでした。(p.32)

→ 「ある時なんか、太陽が沈むのを44回も見たよ！」それからしばらくして君はこうも言ったよね。「あのね ... あんまり悲しい時って、夕日が好きになるものなのさ...」「ということは、44回も見た日、それほど君は悲しかったわけだね？」

しかし、王子は答えてくれませんでした。

3 c 第7-9章 (翻訳: p.33-47)

これらの章も、出だしには依然として“je”が登場しており、純粋な「3人称」の語りに入るのは10章以降のことである。

第7章:『私と王子の物語 (ただし、主題は「花」)』(単純過去主体)

36. Le cinquième jour, toujours grâce au mouton, ce secret de la vie du petit prince me fut révélé. / 5日目に、やはりヒツジのおかげで、僕は王子様のもっている秘密が分かりました。(p.33)

→ 5日目のこと、やはりヒツジの話がきっかけでしたが、王子の人生に秘められたこの秘密が明らかになりました。

「この秘密」は前の章の最後で私が王子にした質問 (Le jour des quarante-quatre fois tu étais donc tellement triste?) を受けている。ここにも、前後関係を考慮しないという視野狭窄症状が見られる。

37. J'étais alors très occupé à essayer de dévisser un boulon trop serré de mon moteur. J'étais très soucieux car ma panne **commençait** de m'apparaître comme très grave, et l'eau à boire qui **s'épuisait** me faisait craindre le pire. / 僕はそのときモーターのボルトがあまりしまりすぎているので、それをはずそうと懸命になっていました。ちょっとやそっとではパンクが直りそうもないので、気が気ではありませんでした。それに、飲み水も底をついていて、手も足も出ないことになりそうだったので。(p.33)

→ そのときエンジンのしっかり締まったボルトをはずそうとして夢中になっていました。故障がとて深刻なようだと思い始めた私は気が気ではなかったからです。それに、飲み水もなくなりそうで最悪の結果になる心配があったのです。

ちなみに, faire craindre le pire は「死」を意味することが多い。

38.— Les épines, ça ne sert à rien, c'est de la pure méchanceté de la part des fleurs ! — Oh ! [...] Les fleurs sont faibles. Elles sont naïves. Elles se rassurent comme elles peuvent. Elles se croient terribles avec leurs épines. /「なんの役にも立ちゃあしないよ, 花は意地悪したいからトゲなんかつけてるんだ」「へえ!」[...] 花は弱いんだ。無邪気なんだ。できるだけ心配のないようにしてるんだ。トゲを自分たちの恐ろしい武器だと思ってるんだ。 (p.34)

→ 「トゲなんかなんの役にも立たないよ。花は意地悪がしたいだけのことなのさ」「なんだって! [...] 花はね弱いんだよ。ちょっとお馬鹿さんなんだ。気休めにすぎないんだけど、トゲがあるから怖いんだぞって自分で信じこんでるんだ」

Oh ! を「へえ!」と訳すのはあまり感心しない。もっとも、この種の間投詞はおそらく欧米の言語と日本語との間に最も距離がある言語現象の1つであり、上手に訳すにはそれなりの職人芸が必要となるだろう。

Elles se rassurent comme elles peuvent. の直訳は「なんとか安心したいと思ってる」。

39.— Et tu crois, toi, que les fleurs... ? Mais non ! Mais non ! Je ne crois rien ! J'ai répondu n'importe quoi. Je m'occupe, moi, de choses sérieuses ! Il me regarda stupéfait. — De choses sérieuses ! Il me voyait, mon marteau à la main, et les doigts noirs de cambouis, penché sur un objet qui lui semblait très laid. /「だのに, 君はほんとにそう思ってるんだね? 花ってものは...」
「ちがうよ, ちがうよ, 僕, なんとも思ってやしないよ。でたらめに返事したんだ。とても大事なことが頭に引っかかっているんでね」王子様はあっけにとられて僕の顔を見ました。「なに, 大事なことって?」王子様は僕を見ました。僕は王子様にとってはたいそう汚く見えるものの

上にかがみながら、カナヅチを手にもって機械油で指を真っ黒にしていたのです。

→ 「なのに、君は思ってるのか、花っていうものが...」「いや、違う！ そうじゃない。何か考えて言ったわけじゃないんだ。いいかげんに返事をしたのさ。なにしろ、真剣なことをしてるんでね！」[...]「真剣なこと？」（そう問いかける）王子の目に映っていたのは、手にハンマーを持ち、指をグリースで真っ黒にして、なんだかとても醜悪そうな物体にかがみ込む私の姿だったのです。

形容詞 *sérieux* がここで「真剣な」と訳されていることについては、やや違和感を覚えるかも知れない。しかし、*sérieux* は作品中のキーワードの 1 つであり。とりわけ大人がこの語を用いるとき、王子は激しく反発することがある。したがって、まったく別の意味の場合は除き、日本語訳においてもできる限り同じ訳語をあてることが望ましい。

内藤訳ではどう処理されているか、次に検証してみよう。

- a. J'ai ainsi eu, au cours de ma vie, des tas de contacts avec des tas de gens *sérieux*. / 僕はそんなことでそうこうしているうちに、たくさんのえらい人たちと飽きるほど近づきになりました。(p.9)
- b. Et il me répéta alors, tout doucement, comme une chose très *sérieuse*: — S'il vous plaît... dessine-moi un mouton. / すると、坊ちゃんはととも大事なことのようにたいそうゆっくり繰り返しました。「ね... ヒツジの絵をかいて！」(p.12-13)
- c. Je m'occupe, moi, de choses *sérieuses* ! / ととも大事なことが頭に引っかかっているんでね (p.34)
- d. Il me regarda stupéfait. — De choses *sérieuses* ! / 王子様はあっけにとられて僕の顔を見ました。「なに、大事なことって？」(p.34)
- e. Et toute la journée il répète comme toi: “Je suis un homme *sérieux* ! Je suis un homme *sérieux* !” et ça le fait gonfler d'orgueil. / そして、日がな一日、君みたいに、忙しい、忙しい、と口

癖に言いながら, 威張りくさっているんだ。(p.35)

- f. Et ce n'est pas *sérieux* de chercher à comprendre pourquoi elles se donnent tant de mal pour se fabriquer des épines qui ne servent jamais à rien? / でも, 花がなぜさんざ苦勞してなんの役にもたたないトゲを作るのか, そのわけを知ろうというのが大事なことじゃないって言うのかい? (p.36)
- g. Ce n'est pas plus *sérieux* et plus important que les additions d'un gros Monsieur rouge? / 太っちょの赤黒先生の寄せ算より大事なことじゃないって言うの? (p.36)
- h. Je suis *sérieux*, moi, je ne m'amuse pas à des balivernes! / 俺は大事な仕事をしてるんだ。下らんことにかかりあっちゃおられん。(p.60)
- i. Je n'ai pas le temps de flâner. Je suis *sérieux*, moi. / そこらをぶらつく暇もないんだ。俺はこれで大事な仕事をしてるんだからね。(p.61)
- j. Mais je suis *sérieux*, moi! Je n'ai pas le temps de rêvasser. / だけど, 俺は大事な仕事をしてるんだからねえ。かってな夢なんか見る暇はないよ。(p.61)
- k. Je suis *sérieux*, moi, je suis précis. / 俺は大事な仕事をしてるんだからね。この数に間違いはないよ。(p.62)
- l. Je compte [les étoiles] et je les recompte. C'est difficile. Mais je suis un homme *sérieux*! / いくつあるのか, 勘定するんだ。何度も勘定しなおすんだ。難しい仕事だが, しかし, 俺はちゃんとした男だからな。(p.64)
- m. C'est amusant. C'est assez poétique. Mais ce n'est pas très *sérieux*.
面白いな。詩的といえば詩的だ。でも, 大事なことじゃないや。(p.64)
- n. Le petit prince avait sur les choses *sérieuses* des idées très différentes des idées des grandes personnes. / 王子様は何が大切かということになると, 大人とはたいへん違った考えをもっていました。

(p.65)

o. Il avait le regard *sérieux*, perdu très loin: / 王子さまは遠いところで迷子にでもなったように、きっとした目をしていました。(p.117)

p. Et il rit encore. Puis il redevint *sérieux*: / 王子さまは、また笑いました。が、やがてまた、まじめな顔になって言いました。(p.121)

以上のような訳語のバラツキは、やや期待はずれと言えるだろう。おそらく少し工夫を加えれば、「真剣な」でそれほど無理なく統一できると思われる。しかし、体系の完全に異なるフランス語から日本語へという翻訳の場合、そこまで完璧を期す必要があるとなると、翻訳者の日本語能力に過重な負担をかけるということになるだろう。

40. Ça me fit un peu honte. Mais, impitoyable, il ajouta: [...] / そう言われて、僕は少し恥ずかしくなりました。しかし、相手はそれにかまわずこう続けました。(p.35)

→ そう言われて。私は少し恥ずかしくなりました。しかし、王子は、容赦なく、こう付け加えました。「[...]」

王子の怒りの強さを尊重するならば、このような小さな手抜きも看過すべきではないだろう。

41. Ce n'est pas important la guerre des moutons et des fleurs? Ce n'est pas plus sérieux et plus important que les additions d'un gros Monsieur rouge? / 花がヒツジに食われることなんかたいしたことじゃないって言うの? 太っちょの赤黒先生の寄せ算より大事なことじゃないって言うの? (p.36)

→ 「[...] ヒツジと花の間に闘いがあるってことは重要じゃないのかい? デブの赤おじさんの足し算ほど真剣で重要なことじゃないのかい?」

la guerre des moutons et des fleurs を「花がヒツジに食われること」と訳すのが訳しすぎかどうかの判断は微妙なところである。

42. Et si je connais, moi, une fleur unique au monde, qui n'existe nulle part, sauf dans ma planète, et qu'un petit mouton peut anéantir d'un seul coup, comme ça, un matin, sans se rendre compte de ce qu'il fait, ce n'est pas important ça ! / 「僕の星には、よそだとどこにもない珍しい花が1つあってね、ある朝、小さなヒツジがうっかりパクッと食っちまうようなことがあるってこと、僕が — この僕が — 知ってるのに、君、それが大事じゃないって言うの？」
(p.36-37)

→ 「そして、僕にはね、僕の星以外のどこにもいない、かけがえのない花がいるっていうこと、そして、その花を子ヒツジがある朝、軽はずみに、ただなんとなく食べてしまって、花がいきなり消えてなくなるかも知れないっていうこと、そういうことって、重大なことじゃないわけ？」

嘘野がこのような訳し方に嫌悪感を抱くのは文法学者の悲しい性であろう。説明するまでもないと思うが、2行目の qu' は si の繰り返しを避ける代用語である。それを知ってか知らずか、connaître... (この場合、相手が人間であれば知己であり、実際、花と王子の間には恋愛感情が存在する) を savoir que... に読み替えて、「... ということを知っている」と曲解するとは ... あまりに粗雑ではないか！「王子には大切な花(女性)がいること」と「その大切な存在がいなくなってしまうかも知れないこと」が明白に浮かび上がるよう工夫したいところである。

43. — Si quelqu'un aime une fleur qui n'existe qu'à un exemplaire dans les millions et les millions d'étoiles, ça suffit pour qu'il soit heureux quand il les regarde. / 「誰かが何百万の星のどれかに咲いているたった1輪の花が好きだったら、その人はそのたぐさんの星を眺めるだけで、幸せになれるんだ。(p.36)

→ 「ある人が、無数の星の中にたった1本しか咲いていない花のことが好きになったら、それだけで、星空を眺めさえすれば、その人は幸せな気持ちになれるんだ」

44. Mais si le mouton mange la fleur, c'est pour lui comme si, brusquement, toutes les étoiles s'éteignaient ! Et ce n'est pas important ça ! / Il ne put rien dire de plus. Il éclata brusquement en sanglots. La nuit était tombée. / それで、ヒツジが花を食うのは、その人の星という星が突然消えてなくなるようなものなんだけど、それも君はたいしたことじゃないって言うんだ」王子様はそれきりなにも言えませんでした。そして、にわかになんと泣き出してしまいました。夜になっていました。(p.36-37)

→ 「でも、花がヒツジに食べられちゃったら、突然、星がみんな消えてしまうのと同じことになるんだよ。それって、重大なことじゃないのかい？」王子はそれっきり何も言えず、突然、しゃくり上げて泣き始めました。(いつの間にか)夜になっていました。

45. Il y avait, sur une étoile, une planète, la mienne, la Terre, un petit prince à consoler ! / ひとりの王子様を1つの星といっても僕の地球上で、なんとかして慰めなければならなかったのです。(p.37)

→ (広い宇宙の)星の1つ、惑星の1つ、(それも)私の惑星、つまり地球上に(ぼつんと)1人の王子がいて、その王子を慰めてやらねばならなかったのです。

46. Je me sentais très maladroit. Je ne savais comment l'atteindre, où le rejoindre... / ものを言うにもへたくそで、うまく言えなかったのです。どうしたら王子様の気持ちになれるのか、どこで王子様の気持ちといっしょになれるのか、それも分かりませんでした...(p.37)

→ 私は自分がとても不器用に感じました。どのようにしたら王子の心に届くことができるのか、どこで心と心を合わせることができるのか、

私には分かりませんでした ...

この内藤訳を細野はうまいと思った。そして、内藤訳には部分的に感心させられることが実に多い。しかし、翻訳の基本はあくまで原文を尊重した上で工夫することではなかろうか。

『星の王子様』

西 村 牧 夫

第2部：花の命は短くて...

Parce que les fleurs sont éphémères...

Conscientes de la force de l'imaginaire des enfants, Marie Bayle, infirmière libérale, et Dominique Bayle, professeur d'éducation physique, cherchent un moyen de leur venir en aide en réalisant leurs rêves.

Elles rencontrent Frédéric d'Agay, petit neveu d'Antoine de Saint Exupéry, qui soutient le projet en accordant gracieusement l'utilisation du nom Petits Princes...

L'Association Petits Princes naît officiellement en décembre 1987...

Le Docteur Philippe Biclet, séduit par le projet, accepte la présidence de l'Association.

<http://www.petitsprinces.com>



第8章：『私と王子の物語』（単純過去）の中に挿入された『花と王子の物語』（大過去）

この章は、伝聞形式になっている。出だしの *J'appris bien vite [...]* と終わりの部分の *Il me confia encore [...]* のように「私」と王子の間の接触は単純過去で語られ、主要部分を占める「花の誕生」や「花と王子のやりとり」は大過去主体となる。つまり、図式化すれば、次のようになる。

〈*J'appris que* + 大過去〉 ← 実際に王子が私に語ったこと「複合過去」
 〈*Il me confia que* + 大過去〉 ← 実際に王子が私に語ったこと「複合過去」

そして、この第8章ではおおむね 〈*J'appris que*〉 〈*Il me confia que*〉 の部分が省略され、大過去主体のテキストになっている。

47. Le petit prince, qui assistait à l'installation d'un bouton énorme, sentait bien qu'il en sortirait une apparition miraculeuse, mais la fleur n'en finissait pas de se préparer à être belle, à l'abri de sa chambre verte. / 大きなつぼみが腰を落ち着けているのをはたで見ている王子様は、今にあっというほど美しいものが見えてくるように思われてなりませんでした。でも、花は緑の部屋にじっとして いて、なかなか化粧をやめません。 (p.38)

→ 王子は、とても大きなつぼみができるのを見ていて、なにか奇跡のように美しいものがそこから現れるのだろうと感じていました。でも、花は緑の部屋にこもったまま、いつまでたっても身なりを美しく整えつづけるのでした。

48. Eh ! oui. Elle était très coquette ! Sa toilette mystérieuse avait donc duré des jours et des jours. Et puis voici qu'un matin, justement à l'heure du lever du soleil, elle s'était montrée. Et elle, qui avait travaillé avec tant de précision, dit en bâillant: —

Ah ! je me réveille à peine... Je vous demande pardon... Je suis encore toute décoiffée. / ええ，ええ，そうですとも，なかなかおしゃれだったのです。そんなわけで，不思議な化粧は幾日も幾日も続きました。ところが，ある日の朝，ちょうどお日様が昇るころ，花はとうとう顔を見せました。なにひとつ手落ちなく化粧を凝らした花はあくびをしながら言いました。「ああ，まだ眠いわ...。あら，ごめんなさい...。あ，たしまだ髪をといていませんから」(p.39)

→ ええ，そうなんです！ この花はとてもコケティッシュだったので。この謎めいた身繕いは何日も何日も続きました。それから，やっとうある朝，ちょうど日の出の時刻に，姿を見せました。そして，あんなに綿密に装いを凝らしてきたというのに，(わざとらしく)あくびをしながらこう言いました。「あら，私ったら，目が覚めたばかりで... ごめんなさい... まだ髪が乱れ放題ですわね」

残念ながら「コケット」，「コケティッシュ」は今時の人には分かってもらえないかも知れない。しかし，王子の旅立ちが彼女（花）のこの性質に起因するのであるから，原文を尊重せざるを得ない。いずれにしても，内藤訳では単に「きれいなだけの女の子」でしかないのが残念。嘘野は，原文にある「自分の女性としての強みをすべて計算し尽くした花」の性格を，自然にそのまま訳出するよう努めた。

49. — Que vous êtes belle ! — N'est-ce pas, répondit doucement la fleur. Et je suis née en même temps que le soleil...

Le petit prince devina bien qu'elle n'était pas trop modeste, mais elle était si émouvante ! — C'est l'heure, je crois, du petit déjeuner, avait-elle bientôt ajouté, auriez-vous la bonté de penser à moi...

Et le petit prince, tout confus, ayant été chercher un arrosoir d'eau fraîche, avait servi la fleur. //「きれいだなあ！」「そうでしょうか」花は静かに答えました。「あたくし，お日様といっしょに生まれた

んですわ」王子様は、この花、あんまり謙遜ではないな、と、確かに思
いはしましたが、でも、ホロリとするほど美しい花でした。「今、朝のお
食事の時刻ですわね。あたくしにも何かいただかせてくださいませ
の...。王子様はどぎまぎしましたが、汲みたての水の入ったジョーロを
とりに行って、花に朝の食事をさせてやりました。(p.39)

→ 「なんて美しいだろう!」「ええ、そうでしょう?」[...]「それに、私、お日様と同時に生まれてきたんですもの...」王子は花があまり謙遜ではないと感じとりましたが、でも、花を見ていると心が揺さぶられるような気がしてくるのでした。やがて、花が「朝ご飯の時間じゃないかしら。私にもなにか用意していただきたいんですけど...」と言い、すっかり申し訳ない気持ちになった王子は、ジョーロに冷たい水を汲んできて、花にかけてあげました。

n'est-ce pas が「そうでしょうか」では、美しさを鼻にかける女の嫌らしさが出てこない。

émouvante の訳は難しい。性格の悪い女だと感じつつ心惹かれる王子の戸惑いをうまく表現したいものだが...

confus も単なる「うろたえ」ではなく、自分のせいでも何でもないので、何となく後ろめたい気持ちにさせられた、いわば女に魅入られてしまった男の情けない姿を思い描くべきであろう。

50. Ainsi l'avait-elle bien vite tourmenté par sa vanité un peu ombrageuse. Un jour, par exemple, parlant de ses quatre épines, elle avait dit au petit prince: — Ils peuvent venir, les tigres, avec leurs griffes ! — Il n'y a pas de tigres sur ma planète, avait objecté le petit prince, et puis les tigres ne mangent pas d'herbe.— Je ne suis pas une herbe, avait doucement répondu la fleur. — Pardonnez-moi. / 花は咲いたかと思うとすぐ、自分の美しさを鼻にかけて王子様を苦しめ始めました。たとえば、ある日のこと、花はそのもっている4つのトゲの話をしながら、王子様に向かってこう

言いました。「爪をひっかけにくるかもしれませんわね，トラたちが!」
 「僕の星にトラなんかいないよ。それに，トラは草なんか食べないから
 ね」と王子様は相手をささぎって言いました。「あたくし，草じゃありませんのよ」と花は甘ったるい声で答えました「あ，ごめんね...」
 (p.40)

→ こんな風に，早くも花は，つんとすましたり，ちょっとすねたりして王子を苦しめ始めたのでした。たとえば，ある日のこと，自分には4つのトゲがあるからと言って，こんなことを言いました。「トラが爪をむき出してやって来たって平気ですからね」王子が「僕の星にはトラなんていないし，それにトラは草なんて食べやしませんよ」と言い返すと，花は悠然と「私は草じゃありませんから」と応じます。「ごめんなさい」

vanité un peu ombrageuse は「自分の美しさを鼻にかけて」よりはずっと複雑な女の性格を表しているが，若いころ長年に渡って女性心理に悩まされた経験豊かな嘘野にとっても的確な翻訳はなかなか難しい。

また，Ils peuvent venir の pouvoir も並のフランス語教師が苦手とするところだろう。もちろん，可能性「かも知れない」と解釈する余地はあるのだが，それでは作者の意図を理解したとは言えない。内藤訳のこれまでの「花」解釈，つまり「きれいでかわいい女の子」という読みの欠点がここにも出ている。ここは，どうしても「虎がやって来るのなら，来るがいい。虎なんかには負けるものか」という，まことに可憐な花の口から出た言葉とは思えない過激な響きを読み取らなければならない。

その流れで doucement を読めば，「甘ったるい」という訳よりも，自分の荒唐無稽な言葉に恬として恥じない「女の堂々たる厚かましき」をほめかす訳にしなければならないのは明らかである。

これ以後，王子は俗に言う「母ちゃんの尻に敷かれっぱなし」という隷属状態に置かれる。

51. “Horreur des courants d'air... ce n'est pas de chance, pour une plante, avait remarqué le petit prince. Cette fleur est bien com-

pliquée...” /「風が吹いてくるのが怖いなんて…。植物なのに、どうしたんだろう。この花っただいぶん気難しいなあ…。」と王子様は考えました。(p.41)

→「風に当たるのがいやだなんて… 植物なのについてないな。この花は*だ*いぶん複雑な性格してるんだ…」と王子は考えました。

52. — Le soir vous me mettez sous globe. Il fait très froid chez vous. C'est mal installé. Là d'où je viens...

Mais elle s'était interrompue. Elle était venue sous forme de graine. Elle n'avait rien pu connaître des autres mondes. Humiliée de s'être laissée surprendre à préparer un mensonge aussi naïf, elle avait toussé deux ou trois fois, pour mettre le petit prince dans son tort: — Ce paravent? /「夕方になったら覆いガラスをかけてくださいね。ここ、とても寒いわ。星のあり場が悪いんですわね。けどあたたくしのもといた国では...」/花はこういいかけて口をつぐみました。もといたと言っても、花がいたのではなくて、種がいたのです。ですから、ほかの世界のことなんか知っているはずがありません。思わずこんなすぐにばれそうな嘘を言いかけたのが恥ずかしくなって、花は王子様をごまかそうと、2,3度せきをしました。「ついでではどうなすったの?...」(p.41-43)

→「晩には覆いガラスをかけてくださいね。あなたのお屋、とても寒いんですもの。設備もきちんとしていないし。ここに来る前にいたところでは...」そういいかけて花は口をつぐみました。種の形でここまでやって来たのですから、ほかの世界を見てきたというのはありえないことです。うっかりこんな見え見えの嘘をつこうとした自分に腹を立てた花は、2,3度咳をして、王子に責任転嫁しようと思いました。「あの風よけのことは(お忘れになったのかしら)?」

Humiliée de s'être laissée surprendre は「恥ずかしくなって」というようなしおらしいものではないであろう。

その流れでいえば，mettre le petit prince dans son tortを「王子様をごまかそうと」と訳すのは，単なる誤訳であるばかりでなく，つつい花（女）がかわいらしいものとしてしまう翻訳者の根本的な誤読を露呈していることになろう。

53. — J'allais le chercher mais vous me parliez !

Alors elle avait forcé sa toux pour lui infliger quand même des remords. / 「とりに行きかけたら，君がなんとか言ったものだから」すると花は無理にせきをして，王子様をすまない気持ちにさせました。(p.42)

→ 「取りに行こうとしてただけど，あなたがお話し中だったから！」すると，花はさらに咳き込んで，結局，王子を申し訳ないという気持ちにさせたのでした。

54. Ainsi le petit prince, malgré la bonne volonté de son amour, avait vite douté d'elle. Il avait pris au sérieux des mots sans importance, et était devenu très malheureux. / そんな仕打ちをされて，本気で花を愛していたのですが，すぐに花の心を疑うようになりました。花がなんでもなく言ったことをまじめに受けて，王子様は情けなくなりました。 (p.42)

→ そんな風に，愛ゆえにどうにかしたいと思いつつも，王子はすぐに花の心を疑うようになりました。花が意味もなくいった言葉を真に受けて，とても不幸な気持ちになったのです。

bonne volonté も多くのフランス語学習者に誤解を与える表現である。「よい意志」とは「善をなそうという気持ち＝善意」というよりは，「何かを達成しようという前向きの気持ち＝やる気，熱意」なのである。逆に，mauvaise volonté 「悪い意志」とは「悪しき，よこしまな意志＝悪意」というよりは，「やりたくない後ろ向きの気持ち」つまり「さぼろうとする態度」ということになる。

55. “J’aurais dû ne pas l’écouter, [...] il ne faut jamais écouter les fleurs. Il faut les regarder et les respirer. La mienne embaumait ma planète, mais je ne savais pas m’en réjouir. / あの花の言うことなんか聞いてはいけなかったんだよ。人間は花の言うことなんていいかげんに聞いていればいいんだから。花は眺めるものだよ。匂いをかぐものだよ。僕の花は僕の星をいいにおいにしてたけど、僕は少しも楽しくなかった。(p.42)

→ 「あの花の言うことなんかに耳を貸しちゃいけなかったんだ。そもそも、花っていうのは、絶対に言うことを聞いてはいけないものなんだよ。花は眺めるもの、香りをかぐものなんだ。僕の花がいい香りで星を包んでいたというのに、僕にはそれを楽しむ能力がなかった。

savoir の意味を出すために嘘野訳は「能力がなかった」となっているが、最終的な翻訳では「花がいい香りで星を包んでくれたのだから、僕はそれを楽しんでやればそれでよかったのにな」としたいところだ。このあたり、王子が星遍歴や地球遍歴を経て成長した姿を見せているのだから、それなりに訳を工夫すべきであろう。

56. Cette histoire de griffes, qui m'*avait* tellement *agacé*, eût dû m’attendrir...” Il me *confia* encore: “Je n’ai alors rien su comprendre ! J’aurais dû la juger sur les actes et non sur les mots. / あの爪の話だって、僕、聞いていてじっとしていられなかったんだろ。だから、かわいそうに思うのが当たり前だったんだけどね...」それから、また、こうも打ち明けて言いました。「僕はあの時、何にも分からなかったんだよ。あの花の言うことなんか取り上げずに、することで品定めしなけりゃあいけなかったんだ。(p.42)

→ あの爪の話にしても、僕はあるなにかかりしっちゃったけど、本当は（強がりなんか言ったりして）可愛いなって思わなきゃいけなかったんだ」 [...] 「あのころ、僕はなにも分かってやれなかった！ 言葉ではなく、どんな風にしてるかで判断してやらなきゃいけなかったのに。」

ここには、今までも触れたように、日本人がもっとも苦手とする条件法（第2形）が使われている。

また、内藤訳は論外としても、新訳のすべてに目を通したわけではないが、attendrir の解釈も含めて、どの翻訳もほぼ全滅の可能性がある部分である。

s'attendrir を仏和辞書につられて「ほろりとする」と訳してはいけない。花が爪（棘）の話をするのを聞いてほろりとする馬鹿はいない。また、条件法だからといって「...すべきだったのかもしれない」と曖昧にしてはいけない。条件法は、反現実を仮定した上ではあるが、断言であることを忘れてはならない。

57. J'aurais dû deviner sa tendresse derrière ses pauvres ruses.

Les fleurs sont si contradictoires ! Mais j'étais très jeune pour savoir l'aimer." / ずるそうなるまいはしているけど、根は優しいんだということ汲みとらなけりゃいけなかったんだ。花のすることったら、ほんとにトンチンカンなんだから。だけど、僕はあんまり小さかったから、あの花を愛するってことが分からなかったんだ。(p.42-43)

→ お粗末なごまかしを言ったりするけど、その裏にある優しさを見てやらなきゃいけなかったんだ。なにしろ、花ってのは矛盾だらけだからね！ でも、僕は幼すぎて、花を愛してあげることができなかった」

ここに至って、「ヒツジを描いて」という言葉から思い描かれる「非常に幼い子供」というイメージを一掃しなければならない。王子は精神的にすっかり成熟していると言えるであろう。

第9章：『花と王子の別離』（単純過去主体）

前の章（大過去主体）と同じく「花と王子の物語」だが、今度は伝聞そのままではなく、再構築済みの「語り」として成立しており、出だしの Je crois... を除き単純過去が用いられている。

また、ここでは花が tutoiement をしていることに注目しておこう。王子の発言は少ない上に、人称代名詞や所有形容詞が使われていないため、王子側が tutoiement しているのか vouvoiement しているのかは分からない。サンテグ

ジュペリが意図的に、曖昧なままにしている可能性もある。

58. Je crois qu'il profita, pour son évacion, d'une migration d'oiseaux sauvages. / 渡り鳥たちがほかの星に移り住むのを見た王子様は、いいおりだと思ってふるさとの星をあとにしたのだとぼくは思いません。

→ 王子は、星からの脱出の際、野鳥たちの渡りを利用したのだと私は思います。

9章の出だしは〈je + 現在形 + 単純過去〉なので悩ましいところだ。「僕はね、王子が星から脱出するとき、野鳥たちの渡りを利用したのだと思うんだ」というように発話者主体の訳にしてもいいだろう。ただ、その後は安定した語りなので、登場人物の“je”として訳したほうがつながりはよい。

59. Le petit prince arracha aussi, avec un peu de mélancolie, les dernières pousses de baobabs. Il croyait ne jamais devoir revenir. / 王子様は、ついこのごろ生えたバオバブの芽をどこか顔を曇らせて抜き取りました。もう二度と帰ってこないつもりだったのです。

→ 王子は、少しもの悲しい気持ちで最後のバオバブの根っこも引き抜きました。もう2度と帰ってくることはないだろうと思っていたからです。

60. Et, quand il arrosa une dernière fois la fleur, et se prépara à la mettre à l'abri sous son globe, il se découvrit l'envie de pleurer. / そして、別れのしるしに花に水をかけて、覆いガラスをかけてやろうとしていると、王子様は今にも涙がこぼれそうになりました。

→ そして、花に最後の水をやり、覆いガラスをかぶせようとしたとき、泣きたくなっている自分に気づきました。

61. — *J'ai été* sotté, lui dit-elle enfin. Je te demande pardon.

Tâche d'être heureux. / Il fut surpris par l'absence de reproches. Il **restait** là tout déconcerté, le globe en l'air. Il ne comprenait pas cette douceur calme. / 「私，馬鹿でした」と花はやっと王子様に言いました。「ごめんなさい。お幸せでね....」王子様は花がちっとも咎めるようなことを言わないので驚きました。そして，覆いガラスを空に向けたまま，すっかり面食らってじっと立っていました。花がどうしてこうおとなしくしているのかわけが分かりませんでした。

→ 「私，馬鹿だった。ごめんなさいね」[...]「(どこかで) 幸せが見つかるよう頑張るってね」

王子は [...] まごついて立ちつくしていました。どうしてこんな風に花が優しく穏やかにしているのか理解できなかったからです。

62. — Mais les bêtes... — Il faut bien que je supporte deux ou trois chenilles si je veux connaître les papillons. Il paraît que c'est tellement beau. / 「でも，けものが....」「あたくし，チョウチョウのお友達になりたかったら，2匹や3匹の毛虫は我慢しなくちゃあね。チョウチョウってなんだかとても美しそうですわ。

→ 「[...] チョウチョウってとてもきれいだっていうじゃありませんか」

3 d 第10-15章 (翻訳：p.48-76)

これらの章は「王子の星遍歴物語」を構成し，〈3人称+単純過去〉の純粋な語り形式になっている。

第10章：『王子と王様の話』（単純過去主体：王様には vous）

63. Il **se trouvait** dans la région des astéroïdes 325, 326, 327, 328, 329 et 330. Il commença donc par les visiter pour y chercher une occupation et pour s'instruire. / 王子様は325, 326, 327, 328, 329, それから330までの星が光っているところに来ました。王子様は星

の見物を始めました。何か仕事をさせてもらって、勉強しようというのでした。(p.48)

→ 王子は小惑星325, 326, 327, 328, 329, 330がある地域に(住んで)いたのです。そこで、まずこれらの(近隣の)星を訪ねて、仕事を見つけ、いろいろ学ぼうとしました。

おそらく、新訳でも、内藤訳のように「来た」もしくは「来ていた」が優勢ではなかろうか。しかし、テキストの出だしの半過去 *se trouvait* はそのような解釈を許容しない。「場面転換」あるいは「時間経過解消」の半過去には、次例のように必ずA時点とB時点の時間的隔たりを示す表現が不可欠だからである。

Ils se rencontrèrent en juin; ***trois mois plus tard***, ils se mariaient.

引用63冒頭の文にはそのような時間経過を示す表現がないため、「もともと(あるいは、たまたま) ... にいた」という解釈があるのみである。

64. — Comment peut-il me reconnaître puisqu'il ne m'a encore jamais vu ! / 「一度も僕に会ったことがないのに、どうして見覚えがあるのだろう」(p.49)

→ 「まだ一度も会ったことがないのに、どうして僕が人民の1人 [臣下] だって分かるのかな？」

65. — Approche-toi que je te voie mieux, lui dit le roi qui était tout fier d'être enfin roi pour quelqu'un. / 「近うよりなさい。そのほうが、もっとよく見えるように」 やっと誰かの王様になれたので、王様は得意になって言いました。(p.49)

→ 「近くに来て、君の顔をもっとよく見せなさい」[...] すっかり得意になって言いました。

- 66.— Ça m'intimide... je ne peux pas... fit le petit prince tout rougissant. / 「胸がドキドキして... もう、できなくなりました...」と王子様は真っ赤になって言いました。(p.48)
→ 「気後れしてしまったもので... あくびが出ません ...」 [...]
67. Il bredouillait un peu et paraissait vexé. / 王様は何か口の中でモグモグ言って、気をもんでいる様子でした。(p.50)
→ [...] 気を悪くしているようでした。
68. “Si j’ordonnais, disait-il couramment, [...]” / 「...」といったふうに、ふだん、すらすらと言う王様でした。(p.50)
→ 「...」と常々 [ふだんから] 言っていたのです。
- 69.— Sire, lui dit-il... je vous demande pardon de vous interroger... — Je t’ordonne de m’interroger, se hâta de dire le roi. / 「陛下...。おたずねしたいことがあります...」 「たずねなさい、命令する」と王様は急いで言いました。(p.50)
→ 「陛下...。恐れ入りますが、おたずねしたいことがあります...」 「たずねなさい、命令する」と王様は相手が言い終わらないうちに [先手を打って] 言いました。
70. Le roi d’un geste discret désigna sa planète, les autres planètes et les étoiles. / 王様はおつに澄まして自分の星とほかの星をずらーっと指差しました。(p.51)
→ (人目につかないように) そっと [...]
71. Mais le petit prince, ayant achevé ses préparatifs, ne voulut point peiner le vieux monarque: - Si votre Majesté désirait être obéie ponctuellement, elle pourrait me donner un ordre raisonnable. / しかし、王子様はすっかり旅の支度をしていたので、年取った

王様にもう苦勞をかけたくなかったのです。「もし陛下がどんなときにも陛下らしくなさるおつもりでしたら、僕に無理のない命令をお下しになるはずなんだがなあ[...]」 (p.54)

→ しかし、旅の支度を終えていた王子は、年取った王様 [君主] に辛い思いをさせたくないで (こう言いました)。「もしちゃんと命令に従って欲しいなら、無理のない命令をお下しになったらいかがでしょう。たとえば [...]」

72. — Je te fais mon ambassadeur, se hâta alors de crier le roi. / Il avait un grand air d'autorité. / それを見た王様は急いで大声で言いました。「その方をわしの大使にするぞ」王様はどんなことでも自分の手のうちにありそうに、いばった顔をしていました。 (p.54)

→ すると王様は急いで「[...]」と大きな声で言ったのです。(そのときの)王様は、とても威厳のある様子をしていました。

73. Les grandes personnes sont bien étranges, se dit le petit prince, en lui-même, durant son voyage. / 大人ってほんとに変なものだなあ、と王子様は旅を続けながらつぶやきました。 (p.54)

→ 旅を続けながら、王子は心の中で「大人ってずいぶんおかしいんだな」と呟きました。

ここから、各章の終わりに4回にわたって同じような表現が使われるが、それぞれ微妙に異なることを忘れてはならない。

第11章：『王子と自惚れ屋の話』(単純過去主体：自惚れ屋には途中で vous から tu に変わる)

74. — Ah ! Ah ! Voilà la visite d'un admirateur ! s'écria de loin **le vaniteux** dès qu'il aperçut le petit prince. Car, pour **les vaniteux**, les autres hommes sont des admirateurs. / 「やあ ! やあ !

俺に感心してる人間がやってきたな」と、うぬぼれ男は王子様を見かけるなり遠くから叫びました。うぬぼれ男の目から見ると、ほかの人はみな自分に感心しているのです。(p.55)

→ 「やあ！ ファンが来てくれたな！」と、自惚れ屋は王子を見かけるなり遠くから叫びました。(なにしろ)自惚れ屋というのは、ほかの人がみな自分のファンだと思っているからです。

内藤訳では、単数定名詞句（この認知フレーム内では唯一の *vaniteux* = 2 番目の星の住人）と複数定名詞句（総称）の違いが分からない。引用 8 でも触れたことだが、このような訳文に接すると、日本人の読み方には名詞限定辞（や動詞時制形）に対する感受性が欠如していると再確認せざるをえない。

75. — Ah oui? dit le petit prince qui ne comprit pas. — Frappe tes mains l'une contre l'autre, conseilla donc le *vaniteux*. / 「あ、そう?」と王子様は言いましたが、相手が何を言っているのか分からなかったのです。手をたたきなさい、パチパチととうぬぼれ男は言いました。(p.56)

→ 相手の言うことが飲み込めない王子は、「へえー？」と言いました。そこで、自惚れ屋は「手を叩いてごらん」と助け船を出しました。

これも繰り返しになるが、日本語では論理関係がなるべく明快になるように、「そこで」、「だから」、「なのに」などの表現で補う必要がある。まして、ここでは原文に *donc* があるのだから、わざわざ曖昧にして読みにくくすることはなからう。

76. Mais *le vaniteux* ne l'entendit pas. *Les vaniteux* n'entendent jamais que les louanges. / だけれど、うぬぼれ男の耳には入りません。ほめ言葉でなくては、うぬぼれ男の耳には決して入らないのです。(p.56)

→ だけれど、自惚れ屋の耳には入りませんは。(なにしろ)自惚れ屋と

いうのは、ほめ言葉以外はまったく耳に入らないからです。

引用74と同じく単数定名詞句（この場合、特定の個人を表す）と複数定名詞句（総称）の問題。

77. — Je t'admire, dit le petit prince, en haussant un peu les épaules, mais en quoi cela peut-il bien t'intéresser? / 「僕、感心するよ」と王子様は心もち肩をそびやかしながら言いました。「でも、人に感心されることが、なんでそう面白いの？」(p.57)

→ 王子は「君って素晴らしいなあ。でも、だからどうだっていうわけ？」と肩をすくめて言いました。

78. Les grandes personnes sont décidément bien, se dit-il simplement en lui-même durant son voyage. / 大人ってほんとに変だな、と王子様は旅を続けながら、無邪気に思いました。(p.57)

→ 旅を続けながら、王子は心の中で「やっぱり、大人ってとっても変だな」とだけ呟きました。

注意力散漫な人たちのために補足すると、前章と比較して、形容詞étrangesが bizarres に変わり、副詞 décidément, simplement が新たに加えられている。

第12章：『王子と酒飲み男の話』（単純過去主体：酒飲み男には tu）

79. — Honte de quoi? s'informa le petit prince qui désirait le secourir. / 「恥ずかしいって、何が？」と王子様は相手の気持ちを引き立てるつもりになって聞きました。(p.59)

→ どうにかしてあげたいと思って、王子は「…」と聞きました。

80. Les grandes personnes sont décidément très très bizarres, se

disait-il en lui-même durant le voyage. / 大人ってとってもおかしいんだなあ，と王子様は旅を続けながら考えていました。(p.59)

→ 旅を続けながら，王子は心の中で「やっぱり，大人ってとってもとっても変だな」と呟いていました。

注意力散漫な人たちのために補足すると，前章と比較して，副詞 bien が très très に変わり，単純過去 se dit-il が半過去 se disait-il になっている。

第13章：『王子とビジネスマンの話』（単純過去主体：ビジネスマンには vous から tu に変わる）

81. Pas le temps de la rallumer. Vingt-six et cinq trente-et-un. Ouf ! Ça fait donc cinq cent un million six cent vingt-deux mille sept cent trente-et-un. /「[...] タバコに火をつける暇もありません。26たす5は31。ウフッ！うまいぞ。これで5億162万2731になったぞ」(p.60)

→ 「[...] タバコに火をつけなおす暇もない。26たす5は31。フーッ！（やれやれ）これで5億162万2731だ」

82.— Hein? Tu es toujours là? Cinq cent un millions de... je ne sais plus... j'ai tellement de travail ! Je suis sérieux, moi, je ne m'amuse pas à des balivernes ! Deux et cinq sept. — Cinq cent un millions de quoi, répéta le petit prince qui jamais de sa vie, n'avait renoncé à une question, une fois qu'il l'avait posée. / 「え？まだそこにいたのか。5億100万って，そりゃあ... いや，知っちゃいないよ... なにしる，こんなに山ほどの仕事だからな。俺は大事な仕事をしてるんだ。下らんことにかかりあっちゃおられん。2たす5は7と...」 「5億100万って，何がさ？」と，一度何か聞き出すと後には引かない王子様は繰り返しました。(p.60)

→ 「なんだ？ ぼうず，まだいるのか。5億100万というのはな，（えー

と)... もう忘れてしまったよ... それほど仕事をやってるんだ！ 真剣にやる質 {たち} なんでね、私は、つまらん暇つぶしなんかしないんだ！ [...]「5億100万って、何がさ？」と、生まれて以来、何か聞き始める
と一度だって後に引いたことのない王子は繰り返しました。

おそらく、大過去 avait renoncé は訳者の目に入っていないと思われる。同じ批判を繰り返すことになるが、ここでも動詞時制形（や名詞限定辞）に対する感受性の欠如が見られる。

もっとも、この場合は半過去（ないしは現在形）と同じように訳しても誤訳とは言えないだろう。

83. La seconde fois ç'a été, il y a onze ans, par une crise de rhumatisme. Je manque d'exercice. Je n'ai pas le temps de flâner. Je suis sérieux, moi. / 2度目は11年前, リュウマチがひどくなって、いても立ってもいられないときだった。運動が足りないんだが、そこら
をぶらつく暇もないんだ。俺はこれで大事な仕事をしてるんだからね。
(p.61)

→ 2度目は11年前だ、ひどいリュウマチになってね。運動不足なのさ。ぶらつく暇もないんだから。真剣にやる質 {たち} なんでね、私は。

この場合の論理構成は〈Je n'ai pas le temps de flâner. → Je manque d'exercice. → une crise de rhumatisme〉であるが、フランス語ではそれぞれを並列すればよいことに注意。それに対し、スタンダードな日本語では論理関係をいちいち明示することが望ましい。

84. La troisième fois... la voici ! Je cinq cent un millions. / 3度目は... 今だよ！俺はたしか5億100万って言ってたな...」(p.61)
→ 3度目は... 今だ！ところで、さっきは5億100万まで計算したっけ」

この半過去 disais donc は中断されたことを再開する場合の常套句。

85. — Cinq cent un millions six cent vingt-deux mille sept cent trente-et-un. Je suis sérieux, moi, je suis précis. 「5億162万2731だよ。俺は大事な仕事をしてるんだからね。この数に間違いはないよ」
(p.62)

→ 「[...] 真剣にやる質 {たち} なんでもね、私は。数には正確なんだ」

sérieux はキーワードなのでこだわって訳す。

86. Quand tu as une idée le premier, tu la fais breveter: elle est à toi. / また、だれよりも先に1つの考えを持ったら、お前はそれに特許をとる。つまり、お前のものだよ。(p.63-64)

→ だれよりも先になにかアイデアを思いついたら、特許をとるのさ。それで、自分のものになる。

tu は一般論を導く。

87. C'est amusant, pensa le petit prince. C'est assez poétique. Mais ce n'est pas très sérieux. | Le petit prince avait sur les choses sérieuses des idées très différentes des idées des grandes personnes. — Moi, dit-il encore, je possède une fleur que j'arrose tous les jours. / 面白いな, と王子様は考えました。詩的といえば詩的だ。でも、大事なことじゃないや。| 王子様は何が大切かということになると、大人とはたいへん違った考えをもっていたのです。| ですから, あらためてこう言いました。「僕はね、花を持ってて, 毎日水をかけてやる。(p.64-65)

→ 「[...]でも、真剣な気持ちでやることじゃない」

真剣に取り組むべきことについて、王子は大人とはたいへん違った考えをもっていました。

(たとえば) こんなことも言いました。「...」

88. Les grandes personnes sont décidément tout à fait extraordinaires, se disait-il simplement en lui-même durant le voyage. / 大人って、まったく変わってるな、と王子様は旅を続けながら、無邪気に考えていました。(p.65)

→ 旅を続けながら、王子は心の中で「やっぱり、大人って、まったくとんでもない代物だな」とだけ呟いていました。

注意力散漫な人たちのために補足すると、前章と比較して、très très bizarres が tout à fait extraordinaires に変っている。

第14章：『王子と点灯夫の話』（単純過去主体：点灯夫には tu）

89. Le petit prince ne parvenait pas à s'expliquer à quoi pouvaient servir, quelque part dans le ciel, sur une planète sans maison ni population, un réverbère et un allumeur de réverbères. / 空のどこかの家もない住んでいる人もない星の上で、街灯と点灯夫がいったいどんな役目をするのか、それは王子様がいくら考えても分からないことでした。(p.66)

→ [...] 王子には、街灯と点灯夫がいったいどんな役に立つのか、いくら考えても説明がつきませんでした。

servir de... と servir à... を混同した単純ミス？

90. — Peut-être bien que cet homme est absurde. Cependant il est moins absurde que **le** roi, que **le** vaniteux, que **le** businessman et que **le** buveur. / 「この男もばかばかしい人なんだろうな。それでも王様やうぬぼれ男や実業屋や呑み助よりはばかばかしくないだろう。(p.66)

→ 「ま、ひょっとして、この男もばかばかしい人なのかもしれない。でも、あの王様や自惚れ屋、ビジネスマンや酒飲み男ほどばかばかしくはないよ。

単数定名詞句（この場合、特定の個人を表す）にこだわれば、総称との違いを出すために「あの」を添えることも考えられる。

ただし、嘘野は常々「定冠詞は“その”と訳してはいけない、定名詞句は裸の名詞で置き換えるのが通常はベスト」と主張している。

91. Au moins son travail a-t-il un sens. Quand il allume son réverbère, c'est comme s'il faisait naître une étoile de plus, ou une fleur. / ともかく、この男の仕事にはなんか意味がある。街灯に火をつけるのは星を1つ余計にキラキラさせるようなものだ。でなかったら、花を1つぽっかりと咲かせるようなものだ。(p.66)

→ 少なくとも、その仕事には意味がある。街灯に火をともしたら、もう1つ星が生まれるようなものだから。あるいは、花が（生まれると言ってもいいな）。

92. Quand il éteint son réverbère, ça endort la fleur ou l'étoile. C'est une occupation très jolie. C'est véritablement utile puisque c'est joli. / 点灯夫が街灯を消すと、花もつぼんでしまうし、星も光らなくなる。とてもきれいな仕事だ。きれいだから、本当に役に立つ仕事だ。(p.66)

→ 街灯を消すと、花とか星は眠ることになる。[...]

内藤訳は、全体的に成功しているかどうかは別にして、日本語の表現者としてある種の理想を追求しており、嘘野もそれを頭から否定するつもりはない。

93. — Bonjour. Pourquoi viens-tu d'éteindre ton réverbère? — C'est la consigne, répondit l'allumeur. Bonjour. / 「こんにちは。な

ぜ、今、街灯の火を消したの？」「命令だよ。や、おはよう」と点灯夫が答えました。(p.66-68)

→ 「[...]」「そういう指示が出てるんでね。や、おはよう」 [...]

94.— La consigne n'a pas changé, dit l'allumeur. C'est bien là le drame ! /「命令は変わりゃしないよ。ところで、それが大変なことなんで、ものも言えないってわけさ。(p. 68)

→ 「[...]それが、まさに深刻なところでね」

95.— Alors? dit le petit prince. — Alors maintenant qu'elle fait un tour par minute, je n'ai plus une seconde de repos. J'allume et j'éteins une fois par minute ! — Ça c'est drôle ! Les jours chez toi durent une minute ! — Ce n'est pas drôle du tout, dit l'allumeur. Ça fait déjà un mois que nous parlons ensemble. /「すると？」と王子様が言いました。「すると、こうだよ。今じゃ、この星のやつが1分間に一巡りすることになってるんで、俺ときたら1秒も休めなくなったんだよ。1分間に1度、火をつけたり消したりするんだからな」「変だなあ！1分間が1日なんて」「ちっとも変なことなんかないよ。俺たちはもう1月も話してるんだぜ」(p.69)

→ 「だからどうなの？」[...]「だから、今じゃ、星が1分間に一巡りするんで、1秒も休めなくなったんだよ。1分ごとに、火をつけたり消したりするんだ」「こりゃ面白いや！君のところじゃ、1日が1分間ていうわけだ」「面白くもなんともないよ。[...]」

相変わらず、drôleの訳がおかしい。ちなみに、日常でこの形容詞が否定文で使われると、次のように「大変だ、辛い、うんざりだ」のニュアンスになる。

Ce n'est **pas drôle** d'être obligé de travailler aussi le dimanche.
J'ai passé tout le dimanche à classer des papiers. **Pas drôle** !

上の引用95でも、点灯夫の言葉はこの意味で解釈すべきところ。しかし、この場合、王子の発言中の *drôle* とのつながりを尊重せざるを得ない。

いずれにしても、このあたりの日常表現は内藤訳のウィークポイントであり、おそらくフランス文学作品の翻訳全般においても、長年、誤訳を生み出してきた。今回の新訳ラッシュの中で現代の翻訳者たちが内藤先生の時代から見てどれだけ成長しているかを検証してみるのも一興であろう。

96. Il se souvint des couchers de soleil que lui-même allait autrefois chercher, en tirant sa chaise. Il voulut aider son ami: / すると、以前、腰掛けている椅子を後ろに引きながら、しきりに夕日を眺めようとしたことが思い出されて、好きな点灯夫の手助けをしたくなりました。 (p.69)

→ 以前、椅子を後ろに引いて夕日を眺めていたことを思い出し、友達となった点灯夫を助けてやろうと思いました。

ジェロンディフなら何でも「...ながら」と訳すのはいかがなものか。

97. — Ce n'est pas de chance, dit le petit prince. — Ce n'est pas de chance, [...]. / 「そりゃ、困ったね」「うん、困ったよ。[...]」 (p.70)

→ 「そりゃ、ついてないね」「うん、ついてない [...]」

98. Cependant c'est le seul qui ne me paraisse pas ridicule. C'est, peut-être, parce qu'il s'occupe d'autre chose que de soi-même. / でも、僕にこっけいと見えない人といったら、あの人きりだ。それも、あの人が自分のことでなく、他のことを考えているからだろう。(p.70)

→ でも、僕から見てこっけいじゃないのはあの人だけだ。それは、たぶん、自分以外のことで一生懸命やっているからだな。

99. Il eut un soupire de **regret** et se dit encore: — Celui-là est le seul dont j'eusse pu faire mon ami. / 王子様は、何か気にかかるよ

うにほっとため息をついて、それからこう考えました。「僕はあの人だけ友達にすればよかったなあ。(p.70)

→ 王子は、何か名残惜しそうなため息をついて、さらにこうも考えました。「(今まで出会った人たちの中では)あの人だけだな、いい友達になれそうだったのは」

「あの人だけ友達にすればよかった」というのは、かなりの曲解ではないか。こだわれば、王子の性格そのものに誤解を与えかねない訳だと思いが...

100. Ce que le petit prince n'osait pas s'avouer, c'est qu'il **regrettait** cette planète bénie à cause, surtout, des mille-quatre-cent-quarante couchers de soleil par vingt-quatre heures ! / 王子様が胸のうちにあることをそのまま言う気になれなかったのは、24時間ごとに1440度も夕日で美しく照らされたその星をとりわけ懐かしく思っているからでした。(p.70)

→ 王子は自分で正直に認める気にはなれなかったのですが、(実は)あの素晴らしい惑星を名残惜しく思ったのは、とりわけ、1日に1440度も夕日を眺めることができるからでした！

確かに、ne pas oser s'avouerの処理は難しそうである。しかし、何よりも内藤訳は論理的にメチャクチャで、典型的な悪訳というべきであろう。

また、視野狭窄症に陥らず、できれば regret (引用99) と regrettait (引用100) という同系の語のつながりが分かるよう訳したいところだ。

第15章：『王子と地理学者の話』（単純過去主体：地理学者には vous）

101. — Quel est ce gros livre? dit le petit prince. Que faites-vous ici? — Je suis géographe, dit le vieux Monsieur. / 「その大きな本は何? ここで何をしてるの?」と、王子様が言いました。「わしは地理学者だ」と、年寄りの先生が言いました。(p.71)

→ 「その大きな本は何ですか？ ここで何をしているのですか？」 [...]

原文では、王子が長幼の序をわきまえた意外に礼儀正しい少年である。主語 (tu vs vous) にも注意を払うべきであろう。

102. — Ça c'est bien intéressant, dit le petit prince. Ça c'est enfin un véritable métier ! / Et il jeta un coup d'oeil autour de lui sur la planète du géographe. / 「そりゃ、面白いなあ、ほんとうに。そんなのが本当の仕事ですよ」 そう言って、王子様は自分のまわりの星にチラと目をやりました。 (p.72)

→ 「そりゃ、ずいぶん面白そうですね、そういうのこそ、本当の職業というものです！」 / そして、王子は自分のまわりをちらっと見て、地理学者の惑星を「観察しました」。

103. — Mais vous êtes géographe ! — C'est exact, dit le géographe, mais je ne suis pas explorateur. Je manque absolument d'explorateurs. / 「だって、おじさんは地理学者でしょ？」 「そりゃ、そうだ。だが、わしは探検家じゃない。探検家なんか、わたしにはまったくご縁がないよ。 (p.72)

→ 「だって、地理学者じゃありませんか！」 「その通り。だが、探検家じゃないからな。ぜんぜん探検家が足りなくて、私は（困っておるのだ）」

103bis. — Les géographies, dit le géographe, sont les livres les plus sérieux de tous les livres. / 「地理学っていうものは、あらゆる本の中でも一番大事なことが書いてある。

→ 「地理の本というのは、あらゆる本の中でも一番真剣に取り組まなければいけないことが書いてある本なのだよ

これは誤訳とは言えないが、恐らくここでも翻訳者は les géographies 「地

理を扱った書物」vs la géographie「地理学」の対立に気がついていないと思われる。

104. — Que les volcans soient éteints ou soient éveillés, ça revient au même pour nous autres, dit le géographe. Ce qui compte pour nous, c'est *la montagne*. Elle ne change pas. /「火山が眠ってしようと、目を覚ましてしようと、わしたちにとっちゃ同じことだよ。わしたちが問題にするのは山だ。山は変わらないからね」(p.76)
→ 「[...] 私たちにとって重要なのは山そのものなんだよ。山であるということは変わらないからね」

文法学者嘘野は孤軍奮闘、あくまでも、複数定名詞句 les volcans(この場合、「すべてを問題にする」総称用法)と単数定名詞句 la montagne(この場合、「本質的部分を問題にする」総称用法)の違いにこだわっている。たぶん、このような使い分けもほとんどの翻訳者が見落とす可能性ありと言えそうだ。

105. — Ça signifie “qui est menacé de disparition prochaine.” — Ma fleur est menacée de disparition prochaine? /「はかない」というのは) そりゃ、《そのうち消えてなくなる》っていう意味だよ。」「僕の花がそのうち消えてなくなるの?」(p.76)
→ 「そりゃ、《近いうちに消えてなくなるかもしれない》っていう意味だよ。」「僕の花が近いうちに消えてなくなるかもしれない?」

106. Ce fut là son premier mouvement de regret. / 王子様ははじめて あの花が懐かしくなりました。(p.76)
→ 王子が後悔しているそぶりをはじめて見せたのは、この時でした。

この引用の前にある王子の言葉 “Ma fleur est éphémère [...] et elle n'a que quatre épines pour se défendre contre le monde ! Et je l'ai laissée toute seule chez moi !” から考えれば、ここは望郷の念というよりは

後悔の念と解釈すべきであろう。

3 e 第16-20章 (翻訳: p.77-88)

第16章: 話し手が『地球について』聞き手に直接語る

出だしの単純過去 fut は、語り (『王子の星遍歴』) としては継続中であることを示している。しかし、その後、vous・現在形・未来形が使われ、実際は物語からの離脱・脱線となる。

第17章: 前章の『地球について』の続き (現在形・未来形・複合過去) [vous は聞き手を指す]

107. Mais ne perdez pas votre temps à ce pensum. C'est inutile.

Vous avez confiance en moi. / Le petit prince, une fois sur terre, fut donc bien surpris de ne voir personne. / みなさんは、そんな余計なことで暇つぶししてはいけませんよ。どっちみち、なんにもならないことなんですからね。ね、そうでしょう? / さて、王子さまは、地球に足をふみいれると、だれもいないので、びっくりしました。
(p.79)

→ でも、君たちはそんな厄介なことをして時間を無駄にしちゃいけないよ。何にもならないから。(ま,) 僕の言うことを信頼してほしいな。

(ここで、物語に戻る)

そんなわけで、地球にやって来たのはいいけれど、ぜんぜん人がいる気配がないので、王子はとても驚きました。

(これ以降)『王子とヘビの物語』(単純過去) [ヘビには tu]

108. Il avait déjà peur de s'être trompé de planète, quand un anneau couleur de lune remua dans le sable. — Bonne nuit, fit le petit prince à tout hasard. / 星を間違えたのではないかと心配していますと, 月の色をした環が, 砂の中に動いています。「こんばんは」

と、王子さまは、べつにあてもなしに言いました。(p.80)

→ 惑星を間違えたのかしらと心配になり始めていたのですが、(そのとき、ふと) 砂の上で月の色をした環が動きました。(そこで) 王子はとちあえず「こんばんは」と言ってみました。

おおかたの日本人には、au hasard = à l'aventure, n'importe comment と à tout hasard = en prévision d'un événement possible の区別がついていないように思われる。

109. Le petit prince s'assit sur une pierre et leva les yeux vers le ciel: — Je me demande, dit-il, si les étoiles sont éclairées afin que chacun puisse un jour retrouver la sienne. / 王子さまは、とある石に腰をおろして、空を見あげながら言いました。「星が光っているのは、みんながいつか自分の星に帰っていけるためなのかなあ。(p.80)

→ 王子は石に腰をおろし、空を見あげて言いました。「星に明かりがともされているのは、いつか(帰るときが来たら)自分の星がどこにあるか誰にでもわかるようにしてるのかもしれないね」

éclairéが使われているのは、第14章の点灯夫との出会いが影響しているのではなかろうか。いずれにしても、星が自ら光を発するというよりは、ほかの要因で光る場合があるということを訳出する必要があると思われる。

110. — Je puis t'emporter plus loin qu'un navire, dit le serpent. / 「あんたを遠くに運んでいくことにかけちゃ、船なんか、おれにかなやしないよ」(p.82)

→ 「船なんかより(ずっと)遠くに君を連れていくこともできるんだぜ」

ここで、飛行機でなく船が引き合いに出されていることには、時代を感じざるを得ない。当時の飛行機は航続距離が短かったことを忘れてはなるまい。

111. — Celui que je touche, je le rends à la terre dont il est sorti, dit-il encore. Mais tu es pur et tu viens d'une étoile... Mais tu es pur et tu viens d'une étoile... / そして、また言いました。「俺がさわったやつぁ、そいつが出てきた地面にもどしてやるんだ。だけどあんたは無邪気な人で、おまけに星からやって来たんだから...」(p.82)
 → そして、こんなことも言いました。「俺がさわってやったら、そいつは自分が出てきた土に戻ることになる。でも、おまえは純なやつで、しかも、どっかの星からやって来たんだし...」

encore という誰しもが分かっていると疑わない語にも畏はあるものだ。「また言う」では「同じことを繰り返す」ことになるだろう。ここでは、「さらに別のことも言う」と解釈しなければいけない。

112. — Tu me fais pitié, toi si faible, sur cette Terre de granit. Je puis t'aider un jour si tu regrettes trop ta planète. Je puis... — Oh ! J'ai très bien compris, [...] / 「あんたみたいに弱い人が、こんな岩でカチカチの地球にやってくるなんて、かわいそうだな。もし、あんたが、いつかあんたの星が懐かしくてたまらなくなったら、俺があんたをなんとか助けてやるよ。それから...」「ああ、わかったよ、わかったよ。...」(p.82-83)
 → 「かわいそうに、か細いおまえがこんな岩でできた地球に来るなんて。故郷の星が懐かしくてたまらなくなったら、俺が手助けしてやるよ。つまりさ...」「あ、(もう言わないで)。君の言いたいことはよく分かった。[...]

ここには1年先の王子の死がほのかに暗示されている。ヘビにすべてを言わず、しかも、王子の脳裏にヘビの存在・役割が刻み込まれたことを印象づけるこの場面は丁寧に訳したい。

第18章：『王子と砂漠の花』（単純過去）[花には tu それとも vous ?]

第19章：『王子とこだま』（単純過去）〔こだまには（複数）〕

113. Mais il n'aperçut rien que des aiguilles de roc bien aiguisées.
— Bonjour, dit-il à tout hasard. — Bonjour... Bonjour... Bonjour...
répondit l'écho. / でも、まるで刃をつきたてたような、とがった岩のほかには、なんにも見えません。「こんにちは」と、王子さまは、べつにあてもなく言いました。[...] (p.85)

→ でも、しっかり研ぎすまされた先の尖った山々しか見えませんでした。(しかし、) 王子はとりあえず「こんにちは」と言ってみました。

第20章：『王子と庭のバラたち』（単純過去）〔バラには vous（複数）〕

114. “Elle serait bien vexée, se dit-il, si elle voyait ça... elle tousse-rait énormément et ferait semblant de mourir pour échapper au ridicule. Et je serais bien obligé de faire semblant de la soigner, car, sinon, pour m’humilier moi aussi, elle se laisserait vraiment mourir...” / 王子さまは考えました。「もし、あの花が、このありさまを見たら、さぞこまるだろう... やたらせきをして、ひとに笑われまいと、死んだふりをするだろう。そしたら、ぼくは、あの花をかいほうするふりをしなければならなくなるだろう。だって、そうしなかったら、ぼくをひどいめにあわそうと思って、ほんとうに死んでしまうだろう...」(p.87-88)

→ [...]「僕の花が、これをを見たら、とっても気を悪くするだろうな... やたらにせきをして、物笑いになるのをいやがって、死んだふりをするだろう。そしたら、僕はどうしたって介抱するふりをしなきゃならなくなる。さもないければ、“あなたが恥知らずなせいよ”と僕のせいにして、ほんとうに死んでしまいかねないんだもの...」

humilier「辱める」はかなり訳しにくい。嘘野の解釈はやや訳しすぎか？

115. Ça et mes trois volcans qui m'arrivent au genou, et dont l'un, peut-être, est éteint pour toujours, ça ne *fait* pas de moi un bien grand prince..." / あれと、ひぎの高さしかない3つの火山—火山も1つは、どうかすると、いつまでも火をふかないかもしれない—ぼくはこれじゃ、えらい王さまなんかになれようがない...(p.88)
→ そんな花と、ひぎの高さしかない3つの火山— [...] —それじゃ、僕はまるでじゃない [なんの取り柄もない?] 王子ってことになるじゃないか...]

ここでは、王子に内省的態度が出てきており、1つの成長を物語ると言えよう。

いずれにせよ、現在形 *fait* であることに注意したい。また、un bien grand prince は訳しにくい。「これじゃ、あまり大した王子とは言えないな」と訳す手もあるが、王子の大きな失望を表すのであれば、なるべく否定的に訳したいところ。

3 f 第21-23章 (翻訳: p.89-102)

第21章: 『王子とキツネの物語』(単純過去) [キツネには tu]

116. C'est alors qu'apparut le renard: - Bonjour, dit le renard. / すると、そこへキツネがあらわれました。「こんにちは」と、キツネが言いました。(p.89)
→ キツネが現れたのは、このときでした。[...]

キツネには初めから定冠詞がついていることに注意したい。「認知フレーム内における唯一性」: ここには、キツネがいなくてはならない、いよいよ出るべき登場人物(?)が出てきたという感じであろう。

117. — Viens jouer avec moi, lui proposa le petit prince. Je suis tellement triste... / 「ぼくと遊ばないかい?」ぼく、ほんとにかなしい

んだから…」と、王子さまはキツネに言いました。(p.89)
 → 「ぼくと遊んでよ。寂しくてたまらないんだ…」[...]

118. — Je ne puis pas jouer avec toi, dit le renard. Je ne suis pas apprivoisé. — Ah ! pardon, fit le petit prince. Mais, après réflexion, il ajouta: — Qu'est-ce que signifie “apprivoiser”? /「おれ、あんたと遊べないよ。飼いならされちゃいけないんだから」とキツネが言いました。「そうか、失敬したな」と、王子さまが言いました。でも、じっと考えたあとで、王子さまは、言いました。「飼いならす」って、それ、なんのことだい？」(p.89-90)

→ 「君とは遊べない。僕は（まだ）なついてないからね」「あ、ごめんね」 / でも、（少し）考えてから、「“なつく”ってどういう意味？」と聞きました。

apprivoiser は他動詞で、「なつく」は自動詞だが、やむをえない。いずれにしろ、いよいよ、この作品中最大の難関、キーワード “apprivoiser” の登場である。

ここで、内藤訳全体における訳語の現れ方を見ておこう。

- a. Je ne puis pas jouer avec toi [...]. Je ne suis pas *apprivoisé*. / おれ、あんたと遊べないよ。飼いならされちゃいけないんだから (p.89)
- b. Qu'est-ce que signifie “*apprivoiser*”? / 「飼いならす」って、それ、なんのことだい？ (p.90)
- c. Qu'est-ce que signifie “*apprivoiser*”? (p.90)
- d. Qu'est-ce que signifie “*apprivoiser*”? — C'est une chose trop oubliée, dit le renard. Ça signifie “créer des liens...” / 「飼いならす」って、それ、なんのことだい？「よく忘れられてることだがね。「仲よくなる」っていうことさ」(p.90)
- e. Mais, si tu m'*apprivoises*, nous aurons besoin l'un de l'autre. / だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、

はなれちゃいられなくなるよ。(p.90)

- f. Il y a une fleur... je crois qu'elle m'a *apprivoisé*... /「花が1つあってね...。その花がぼくになついていたようだけど...」(p.91)
- g. Mais, si tu m'*apprivoises*, ma vie sera comme ensoleillée./ だけど、もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、おれは、お日さまにあたったような気もちになって、暮らしてゆけるんだ。(p.92)
- h. Alors ce sera merveilleux quand tu m'*auras apprivoisé* ! / あんたが俺と仲よくしてくれたら、俺にゃそいつがすばらしいものに見えるだろう。(p.92)
- i. S'il te plaît... *apprivoise-moi* [...] ! /「なんなら... おれと仲よくしておくれよ」(p.94)
- j. On ne connaît que les choses que l'on *apprivoise*, dit le renard. / 「自分のものにしてしまったことでなけりゃ、なんにもわかりゃしないよ。(p.94)
- k. Si tu veux un ami, *apprivoise-moi* ! / あんたが友だちが欲しいんなら、おれと仲よくするんだな。(p.94)
- l. Ainsi le petit prince *apprivoisa* le renard. / 王子さまはこんな話をしあっているうちにキツネと仲よしになりました。(p.97)
- m. C'est ta faute [...], je ne te souhaitais point de mal, mais tu as voulu que je t'*apprivoise*... / そりゃ君のせいだよ。ぼくは君にちょっと悪いことしようとは思わなかった。だけど君はぼくに仲よくしてもらいたがったんだ... (p.97)
- n. Personne ne vous a *apprivoisées* et vous n'*avez apprivoisé* personne. / だあれも、あんたたちとは仲よくしなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲よくしなかったんだからね。(p.98)
- o. Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as *apprivoisé*. / めんどうみた相手にはいつまでも責任があるんだ。(p.99)
- p. On risque de pleurer un peu si l'on s'est laissé *apprivoiser*. / 仲のよい相手ができると、人はなにかしら泣きたくなくなるのかもしれない。(p.113)

「飼い慣らす」でもよさそうだが、ここではとりあえず、「なつかせる」・「なつく」で統一しておく。

119. — Les hommes, dit le renard, ils ont des fusils et ils chassent. C'est bien gênant ! Ils élèvent aussi des poules. C'est leur seul intérêt. / 「人間てやつあ、鉄砲もってて、狩をするんだから、俺たち、手も足も出ないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間てやつにゃ趣味がないときてるんだ。(p.90)

→ 「人間てさ、鉄砲持ってて、狩りをするんだ。ほんとに困ったもんだ。ニワトリも飼ってるけど、人間の取り柄はそれだけだな」

intérêt のような多義語は誤訳を生みやすい。それにしても、「人間にはニワトリ飼育以外の趣味はない」という訳はいかなる論理あるいは知見から生じるものなのか！ 原文を素直に読めば、どう考えても「キツネにとっての、人間のマイナス点＝狩猟、プラス点＝ニワトリ飼育」という図式しか浮かんでこないはずだが。

120. Qu'est-ce que signifie "apprivoiser"? — C'est une chose trop oubliée, dit le renard. Ça signifie "créer des liens..." / 「飼い慣らす」って、それ、なんのことだい？」「よく忘れられてることだがね。「仲よくなる」っていうことさ」(p.90)

→ 「[...] “なつく”って、どういう意味？」「とかく忘れがちなことなんだが、“結ばれて離れられなくなる”という意味さ」

121. Mais, si tu m'apprivoises, nous aurons besoin l'un de l'autre. Tu seras pour moi unique au monde. Je serai pour toi unique au monde. / だけど、あんたが、おれを飼い慣らすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとって、かけがえのないものになるんだよ...」(p.90-91)

→ でもね、君が僕をなつかせたら、僕たちは互いになくってはならないものになる。君は僕にとってこの世でかけがえのないものになるし、僕は君にとってこの世でかけがえのないものになるんだ。

unique を「たったひとりのひと」/「かけがえのないもの」のように訳し分ける必然性はまったくない。むしろ、可能な限り同じ訳語を当てるべきだろう。

122. — Je commence à comprendre, dit le petit prince. Il y a une fleur... je crois qu'elle m'a apprivoisé... /「なんだか、話が分かりかけたようだね」と王子さまが言いました。「花が1つあってね... その花がぼくになついていたようにだけど...」(p.91)

→ 「(なるほど)分かってきたぞ。[...] (あのね,) 1輪の花がいるんだけど... その花は(どうやら)僕をなつかせたってことになりそうだ...」

123. — Il y a des chasseurs, sur cette planète-là? — Non. — Ça c'est intéressant ! Et des poules? — Non. — Rien n'est parfait, soupira le renard. /「その星の上には、狩人がいるかい?」「いないよ、そんな人」「そいつあ、面白いね。じゃ、ニワトリは?」「いないよ、そんなもの」「いや、どうも思い通り/にゃいかないもんだなあ」と言って、キツネはため息をつきました。(p.91)

→ 「その星には、狩をするやつがいるのかな?」「いない」「(ほう,) そりゃあ、いいね! じゃ、ニワトリは?」「いない」「(やっぱり,) いいことづくしなんてあるわけないか」

124. Mais, si tu m'apprivoises, ma vie sera comme ensoleillée. Je connaîtrai un bruit de pas qui sera différent de tous les autres. /だけど、もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、おれは、お日さまにあたったような気もちになつて、暮らしてゆけるんだ。足音だつて、きょうまできいてきたのとは、ちがったのがきけるんだ。(p.92)

→ 「でもね、もしも君が僕をなつかせてくれたら、僕の生活は太陽に照らされたように晴れやかになる。ほかの足音とはぜんぜん違う（特別な）足音が耳に響くようになる」

125. Et puis regarde ! Tu vois, là-bas, les champs de blé? Je ne mange pas de pain. Le blé pour moi est inutile. Les champs de blé ne me rappellent rien. Et **ça**, c'est triste ! / それから、あれ、見なさい。あの向こうに見える麦ばたけはどうだね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんて、なんにもなりゃしない。だから麦畑なんか見たところで、思い出すことって、なんにもありゃしないよ。それどころか、俺はあれ見ると気がふさぐんだ。 (p.92)

→ それに、見てごらん！ あそこに麦畑が見えるだろ。僕はパンを食べないから、僕にとって麦はなんの役にも立たない。麦畑を見ても、なんにも感じないわけだ。でも、それって寂しいことだよね！

内藤訳を素直に解釈すると、「麦というものは悲しい思いをさせる = Les blés, c'est triste」という総称解釈になるだろう。確かに、総称の複数定名詞句は *ça* で受けることがある。しかし、その場合、〈les N, *ça* + 動詞〉あるいは〈les N, c'est+ 形容詞〉の形が原則である (Les hommes, **c'est** bête, **ça** ne **pense** pas à ces choses-là)。したがって、引用文のように Et **ça**, c'est triste の形は取りえない。この *ça* は前の文の内容を受ける単なる中性代名詞である。

126. Mais tu as des cheveux couleur d'or. Alors ce sera merveilleux quand tu m'auras apprivoisé ! Le blé, qui est doré, me fera souvenir de toi. Et j'aimerai le bruit du vent dans le blé... / だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたが俺と仲よくしてくれたら、俺にゃそいつがすばらしいものに見えるだろう。金色の麦を見ると、あんたを思い出すだろうな。それに、麦を吹く風の音も俺にゃうれしいだろうな...。 (p.93-94)

→ でも、君が金色の髪をしているから、僕が君になついたら、素晴らしいことが起きるよ！ 麦は、黄金色だから、君のことを思い出させてくれる。そして、麦畑を吹き抜ける風の音だって好きになる ...

127. Le renard se tut et regarda longtemps le petit prince: — S'il te plaît... apprivoise-moi, dit-il ! — Je veux bien, répondit le petit prince, mais je n'ai pas beaucoup de temps. / キツネはだまって、長いこと、王子さまの顔をじっと見ていました。「なんなら... おれと仲よくしておくれよ」と、キツネが言いました。「ぼく、とても仲よくなりたいたんだよ。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。 (p.94)

→ キツネはだまって、長いこと王子を見つめました。「頼む... 僕をなつかせておくれよ！」[...]「そりゃいいけど、でも、あんまり時間がないんだ。

128. — On ne connaît que les choses que l'on apprivoise, dit le renard. Les hommes n'ont plus le temps de rien connaître. / 「自分のものにしてしまったことでなけりゃ、なんにもわかりゃしないよ。人間ってやつあ、今じゃ、もう、なにもわかるひまがないんだ。 (p.94)

→ 「自分になつてもらってはじめて、物事って分かるものなんだ。
(ところが) 人間には、もう、何ごとにつけ (そんな風に) 分かるだけの時間がないんだ」

129. Si tu veux un ami, apprivoise-moi ! — Que faut-il faire? dit le petit prince. / あんたが友だちが欲しいんなら、おれと仲よくするんだな / 「でも、どうしたらいいの？」[...] (p.94)

→ 「[...] 友達が欲しいのなら、僕をなつかせるんだな！」 [...]

130. Je te regarderai du coin de l'oeil et tu ne diras rien. Le langage est source de malentendus. Mais, chaque jour, tu **pourras** t'asseoir un peu plus près... / おれはちよいちよい横目で見る。あん

たは、なんにも言わない。それも、言葉ってやつが勘違いのもとだからだよ。一日一日とたってゆくうちにゃ、あんたはだんだん近いところへ来て、座れるようになるんだ...」(p.94-95)

→ 僕が横目で見ると、君はなんにも言っちゃいけないよ。言葉っていうのは誤解のもとだからね。でも、毎日、少しずつ近づいて座るのはかまわない。

厄介な pouvoir だが、ここでは許可を表す。

131. Le lendemain revint le petit prince. — Il **eût** mieux **valu** revenir à la même heure, dit le renard. / あくる日、王子さまは、またやってきました。「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ。」(p.95)

→ [...]「同じ時刻に来てもらったほうがよかったのに ...」。

eût valu は条件法過去第 2 形。日本人の苦手な条件法は、やはり正解が出にくいようだ。条件法の根本に反現実があることを頭では分かっているが、残念なことに、そこから正しいイメージを思い描くことができない人が多い。

132. Si tu viens, par exemple, à quatre heures de l'après-midi, dès trois heures je commencerai d'être heureux. Plus l'heure avancera, plus je me sentirai heureux. / あんたが午後 4 時にやってくるとすると、おれ、3 時にはもう嬉しくなるだろう。そして、時刻がたつにつれて、俺は嬉しくなるだろう。(p.95)

→ たとえば、君が 4 時に来ることになっているとしよう。そしたら、僕はもう 3 時ごろには、そろそろ幸せになりは始めるわけ。(そして、時間がたつにつれて、ますます幸せな気分になる」

133. A quatre heures, déjà, je m'agiterai et m'inquiéterai: je découvrirai le prix du bonheur ! / 4 時にはもうおちおちしていられなく

なって、おれは幸福のありがたさを身にしみて思う。(p.95)

→ 4時には、もう、そわそわして、(ひょっとして何かあったんじゃないかと)不安になったりする。(つまり)幸せってものの価値を実感するわけさ!

134. Mais si tu viens n'importe quand, je ne saurai jamais à quelle heure m'habiller le coeur... Il faut des rites. — Qu'est-ce qu'un rite? dit le petit prince. ? C'est aussi quelque chose de trop oublié, dit le renard. / だけど、もし、あんたがいつでもかまわずやってくるんだと、いつ、あんたを待つ気持ちになっていいのか、てんで分かりっこないからなあ... 決まりがあるんだよ「きまりって、それ、なにかい?」と、王子さまが言いました。「そいつがまた、とにかくいいかげんにされているやつだよ」と、キツネが言いました。(p.95)

→ でもさ、もし、でたらめな時間に来られたら、いつ、自分の心の装いをしていいか、ぜんぜん分からない... (要するに、儀式の)段取りみたいなものが必要なんだ「段取りって、なに?」[...]「これもまた、とかく忘れがちなことだね」

135. Ainsi le petit prince apprivoisa le renard. Et quand l'heure du départ fut proche: — Ah ! dit le renard... Je pleurerai. / 王子さまはこんな話をしあっているうちにキツネと仲よしになりました。だけれど、王子さまが別れていく時刻が近づくとキツネが言いました。「ああ! ... まった、おれ、泣いちゃうよ」(p.97)

→ 王子はこんな風にしてキツネをなつかせたのでした。そして、王子が去っていく時刻が近づくと、キツネが言いました。「ああ! ... 僕、泣いちゃうかもしれないな」

136. — C'est ta faute, dit le petit prince, je ne te souhaitais point de mal, mais tu as voulu que je t'apprivoise... — Bien sûr, dit le renard. / 「そりゃ君のせいだよ。ぼくは君にちっとも悪いことしよ

うとは思わなかった。だけど君はぼくに仲良くしてもらいたがったんだ...」「そりゃそうだ」と、キツネが言いました。(p.97)

→「そりゃ君のせいだよ。僕は君を辛い目にあわそうなんて思わなかったのに、君のほうがなつかせてくれと言ったんだ...」「ほんとだね」[...]

137. Tu reviendras me dire adieu, et je te ferai cadeau d'un secret. / それから、あんたがおれにさよならを言いに、もう1度ここに戻ってきたら、おれはおみやげにひとつ秘密を贈り物にするよ」(p.97)
→ (最後の) お別れを言いにもう一度来ておくれ。そうしたら、ある秘密をプレゼントしてあげるから」

138. Le petit prince s'en fut revoir les roses: — Vous n'êtes pas du tout semblables à ma rose, vous n'êtes rien encore, leur dit-il. Personne ne vous a apprivoisées et vous n'avez apprivoisé personne. / 王子さまは、もう一度バラの花を見にいきました。「あんたたち、ぼくのバラの花とはまるっきり違うよ。それじゃ、ただ咲いてるだけじゃないか。だあれも、あんたたちとは仲良くしなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲良くしなかったんだからね。(p.98)
→ 王子は、もう一度バラの花たちに会いにいきました。「君たちは僕のバラの花とはまるっきり違う、まだ、なんの価値もないからね。ぜんぜん、誰かになついたらわけでも、なつかれたわけでもないんだから。

139. Et les roses étaient bien gênées. — Vous êtes belles, mais vous êtes vides, leur dit-il encore. On ne peut pas mourir pour vous. / そういわれて、バラの花たちは、たいそうきまりわがりました。「あんたたちは美しいけど、ただ咲いてるだけなんだね。あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ。(p.98)
→ そう言われて、バラの花たちは、(どう答えたらいいのか) たいへん困ってしまいました。「君たちは美しいけれど、中身は空っぽなんだ。君たちのために、死ぬわけにはいかないんだ。

140. Bien sûr, ma rose à moi, un passant ordinaire croirait qu'elle vous ressemble. Mais à elle seule elle est plus importante que vous toutes, puisque c'est elle que j'ai arrosée. / そりゃ、ぼくのバラの花も、なんでもなく、そばを通ってゆく人が見たら、あんたたちとおんなじ花だと思うかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくには、あんたたちみんなよりも、たいせつなんだ。だって、ぼくが水をかけた花なんだからね。(p.98)

→ もちろん、僕のバラだって、ただの通行人から見れば君たちと似ているかもしれないけど、でも、僕のバラ一輪だけで、君たち全部を合わせたよりも大切なんだ。だって、僕が水をかけてあげたんだから。

141. — C'est le temps que tu as perdu pour ta rose qui fait ta rose si importante. — C'est le temps que j'ai perdu pour ma rose... fit le petit prince, afin de se souvenir. / 「あんたがあなたのバラの花をととても大切に思ってるのはね、そのバラの花のために暇つぶししたからだよ」 「ぼくがぼくのバラの花をととても大切に思ってるのは...」 と王子さまは、忘れないように言いました。(p.99)

→ 「君のバラがなぜそんなに大切かというね、バラのために（惜しげもなく）時間を使ったからさ」「僕がバラのために（惜しげもなく）時間を使ったから ...」 [...]

142. Tu deviens responsable pour toujours de ce que tu as apprivoisé. Tu es responsable de ta rose... — Je suis responsable de ma rose... répéta le petit prince, afin de se souvenir. / めんどうみた相手にはいつまでも責任があるんだ。まもらなけりゃならないんだよ、バラの花との約束をね... 「ぼくはあのバラの花との約束をまもらなけりゃいけない...」 と王子さまは、忘れないように繰り返しました。(p.99)

→ なつてきた相手には、いつまでも面倒を見てあげなきゃいけない。君はバラの面倒を見てあげなきゃいけないんだ...」「僕はバラの面

倒を見てあげなきゃいけない…」 […]

第22章：『王子と aiguilleur』（単純過去）[aiguilleur には tu]

143. J'expédie les trains qui les emportent, tantôt vers la droite, tantôt vers la gauche. / おれの送りだす汽車が、旅客を右に運んで いったり、左に運んでいったりするんだ」と、スイッチ・マンが言いました。(p.100)

→ 「旅行客を運ぶ列車を、右側に送り出したり、左側に送り出したりするんだ」 […]

144. — Ils sont bien pressés, dit le petit prince. Que cherchent-ils? — L'homme de la locomotive l'ignore lui-même, dit l'aiguilleur. / 「みんな、たいへんいそいでるね。なにさがしてるの、あの人たち？」 「それ、機関車に乗ってる男が知らないんだよ」(p.100)

→ […]「機関士だって知らないんだ」

145. — Ils reviennent déjà? demanda le petit prince. — Ce ne sont pas les mêmes, dit l'aiguilleur. C'est un échange. / 「みんな、もう、もどってきたんだね」と、王子さまがきました。「あれ、おんなじ客じゃないんだ。すれ違ったんだよ」と、スイッチ・マンが言いました。(p.100)

→ 「(おや) もう、戻ってきたの?」と、王子が聞きました。「(さっき出て行ったのとは) 違う人たちだよ。入れ違っていてわけさ」 […]

146. Ils perdent du temps pour une poupée de chiffons, et elle devient très importante, et si on la leur enlève, ils pleurent... / きれでできた人形なんかで暇つぶして、その人形をととも大切にしている んだ。もし、その人形を取り上げられたら、子供たちは泣くんだ...。」と、王子さまが言いました。(p.101)

→「ぼろ切れでできた人形にでも、子供たちは（惜しげもなく）時間を使う。すると、人形がとても大切なものになる。だから、人形を取り上げられたりしたら、子供たちは泣いちゃうんだ...。」

第23章：『王子と商売人』（単純過去）〔商売人には tu〕

3 g 第24-25章（翻訳：p.103-113）

第10章で「星遍歴」が始まってからここまで、王子の片々たる言葉の端々から「僕」が再構築した3人称の「王子の遍歴物語」が続いてきた。この1人の少年の成長物語はキツネとの出会いでほぼ完成し、再び砂漠上の「私と王子の物語」に戻って一気にクライマックスを迎える。「僕」が王子と言葉を交わし始めて1週間がたっている。

第24章：『私と王子の物語』（8日目）“井戸を求めて”（単純過去）

147. *Nous en étions au* huitième jour de ma panne dans le désert, et *j'avais écouté* l'histoire du marchand *en buvant* la dernière goutte de ma provision d'eau: — Ah ! dis-je au petit prince, / ぼくの飛行機が、砂漠の中で故障してから8日め、もう一しづくしか残っていない貯えの水をのみながら、丸薬商人の話に耳をすましたぼくは、王子さまに向かって、こう言いました。

→ 砂漠に不時着してから8日目、水筒の最後の一滴を飲みながら、薬屋の話聞いたところでした。[...]

147bis.[...] ils sont bien jolis, tes souvenirs, mais je n'ai pas encore réparé mon avion, je n'ai plus rien à boire, et je *serais* heureux, moi aussi, si je pouvais marcher tout doucement vers une fontaine ! / 「じつにおもしろい話だ。だけど、まだ飛行機の修繕ができてないし、それに飲み水が、もう一滴もない、このありさまなんだ。だから、ぼくも、どこかの泉のほうへ、ゆっくりゆっくり歩いてい

けたら、うれしいんだがなあ!」(p.103)

→ 「君の思い出話はとてもすてきだね。でもさ、まだ飛行機の修理もできてないし、もう飲むものもないんだ。泉に向かってゆっくり歩くなんて（夢みたいな）ことができたら、そりゃ、僕だって、うれしいけどね（そんな場合じゃないんだよ）！」

内藤訳では、むしろ「私」は「泉を探しに行きたい」と言っているように読める。しかし、例によって日本人の苦手な条件法である。現実ではありえないのだということが明白に分かるよう、少々しつこく訳さねばなるまい。

148. — C'est bien d'**avoir eu** un ami, même si l'on va mourir. Moi, je suis bien content d'avoir eu un ami renard... /「死にそうになっても、一人で友達がいるのはいいものだよ。ぼくはね、キツネと友だちになれて、ほんとにうれしいよ...」(p.103)

→ 「もうじき死ぬという時でも、友達ができたってことは、いいことだよ。僕、とてもうれしいんだ、キツネの友だちができて...」

主語が on で一般論だが、実は王子が死ぬ覚悟だということを暗示するような訳文にしたいところだ。もちろん、1 番目のセンテンスと 2 番目のセンテンスは無関係と読んでもいいが、両者を結びつけて 2 番目のセンテンスの裏に “Moi, je vais mourir.” が隠れていると読むこともできる。

149. Il ne mesure pas le danger, me dis-je. Il n'a jamais ni faim ni soif. Un peu de soleil lui suffit. / このぼっちゃん、どんなに危ないことになってるか、分かっていないんだ。ひもじい思いをしたためしもないし、のどが渴いたためしもないんだ。ほんのちょっと日の光が射してくればそれで満足してるんだ、と、ぼくは考えました。(p.104)

→ この子は危険ということが分かっていない。お腹がすくことも、のどが渴くことも、ぜんぜんないんだから。少し日が照れば、それでじゅうぶんなんだ、と私は考えました。

内藤訳に対応するフランス語は明らかに複合過去でなければならないが、原文は現在形である。

150. J'eus un geste de lassitude: il est absurde de chercher un puits, au hasard, dans l'immensité du désert. / ぼくは疲れたような身振りをしました。こんな果てしない砂漠の中で、いきあたりばったり井戸をさがすなんて、ばかげたことだと思ったからです。(p.104)

→ 私は、もういい加減にしてくれという身振りをしました。広大な砂漠の中であてもなく井戸をさがすなんて馬鹿げています。

「馬鹿げたことだと思う」→「疲れる」という因果関係は成立するか？

151. Quand nous eûmes marché, des heures, en silence, la nuit tomba, et les étoiles commencèrent de s'éclairer. / ぼくたちが、なん時間かだまって歩いていると、日が暮れて、星が光りはじめました。(p.104)

→ 私たちは、何時間も黙って歩きました。すると、夜になって、星に明かりが灯 {とも} りはじめました。

引用109のコメントを参照。

152. Je ne compris pas sa réponse mais je me tus... Je savais bien qu'il ne fallait pas l'interroger. / 王子さまがなぜそういう返事をしたのか分からなかったのですが、それでもぼくは口をつぐみました... 王子さまにそのわけを聞いてもしようがないことがよく分かっていたからです。(p.104)

→ [...] 王子に問いただそうとしてはいけないとよく分かっていたからです。

「そのわけを聞いてもしようがない」はいろいろに読める。「答は決まってい

る、怪しい, etc.], 「どんな答であろうと意味がない」, 「相手は嘘つき, 答えようという意志がない, etc.」など。従って, 内藤訳でも一向にかまわない。しかし, 今までの人生で決して人の質問に答えたことのない王子には「質問してはいけない」のである。サンテグジュペリの選択が *ça ne sert à rien de...* ではなく *il ne faut pas...* であることは尊重すべきであろう。ま, おおかたには馬の耳に念仏であろうが...

153. Et, après un silence, il dit encore: — Les étoiles sont belles, à cause d'une fleur que l'on ne voit pas... / すると, 王子さまは, しばらくだまっていたあとで, また, こう言いました。「星があんなに美しいのも, 目に見えない花が1つあるからなんだよ...」(p.105)

→ すると, しばらく黙っていた王子がこんなことも言いました。「星ってきれいだね。それは, 花がいるからなんだ, 目には見えないけど...」

dit encore は, この場合, 「また言う」なく「さらに別のことも言う」。引用111を参照。

154. Et c'était vrai. J'*ai* toujours *aimé* le désert. On s'assoit sur une dune de sable. On ne voit rien. On n'entend rien. Et cependant quelque chose rayonne en silence... / まったくその通りでした。ぼくはいつも砂漠が好きでした。砂山の上に腰を下ろす。なんにも見えません。なんにも聞こえません。だけれど, 何かがひっそり光っているのです... (p.105)

→ (いや, それはまったくその通りだったな。(実は)僕は(昔から)ずっと砂漠が好きだったんだよ。砂山の上に腰を下ろすと, 何も見えない, 何も聞こえない。けれど, それでいて, 何かがひっそりと光を放っているんだよね...)

〈“je” + 複合過去〉があることから, 嘘野訳のように, この一節全体を「発話

者“je”の語りへの闖入と読むことも可能である。

155. Je fus surpris de comprendre soudain **ce** mystérieux rayonnement du sable. / とつぜん，ぼくは，砂がそんなふうに，ふしぎに光るわけがわかっておどろきました。(p.105)

→ 砂が光って見えるというその謎がいきなり解けて，私は驚きました。

内藤訳では、「とつぜん」がどこにかかるか曖昧。できるかぎり曖昧さを避けるのは，物書きにとって必要最低限のマナーではなからうか。

156. Comme le petit prince s'endormait, je le pris dans mes bras, et me remis en route. / 王子さまが眠りかけたので，ぼくは両腕でかかえて歩きだしました。(p.106)

→ 王子が眠りかけたので，私は彼を抱き上げ，歩きだしました。

157. Je regardais, à la lumière de la lune, **ce** front pâle, **ces** yeux clos, **ces** mèches de cheveux qui tremblaient au vent, et je me disais: ce que je vois là n'est qu'une écorce. Le plus important est invisible... / ぼくは，月の光で，王子さまの青白い顔を見ていました。ふさいでいる目を見ていました。ふさふさした髪の毛が，風にふるえているのを見ていました。そして，いま，こうして目の前で見ているのは，人間の外がわだけだ，一番たいせつなものは，目に見えないのだ... と思っていました。(p.106)

→ 私は見つめていました，月の光に照らされたこの青ざめた額，この閉じた目，風にそよいでふるえるこの髪を ... [...]

指示形容詞は尊重したい。

158. Comme ses lèvres entr'ouvertes ébauchaient un demi-sourire,

je me dis encore: “Ce qui m’émeut si fort de ce petit prince endormi, c’est sa fidélité pour une fleur, c’est l’image d’une rose qui rayonne en lui comme la flamme d’une lampe, même quand il dort...” / 王子さまのくちびるが、心もち開いて、どこともなしに笑顔が見えるのです。ぼくはまたこう思いました。「この王子さまの寝顔を見ると、ぼくは涙の出るほどうれしいんだが、それも、この王子さまが、一輪の花をいつまでも忘れずにいるからなんだ。バラの花のすがたが、ねむっているあいだも、ランプの灯のようにこの王子さまの心の中に光っているからなんだ...」(p.106)

→ 少し開いた王子の唇にかすかなほほえみが浮かんでいるのを見て、私はこうも思いました。「この王子様の寝顔にこんなにも心が揺さぶられるのは、彼が一輪の花をいつまでも大切に思い続けているからなんだ。眠っていても、この子の中でバラの花（の姿）がランプの炎のように光を放っているんだ...」

第25章：『私と王子の物語』“井戸辺にて”（単純過去）

159. — Les hommes, dit le petit prince, ils s’enfournent dans les rapides, mais ils ne savent plus ce qu’ils cherchent. / みんなは特急列車に乗り込むけど、今ではもう何を探してるのか、分からなくなってる。(p.107)

→ 「人間て、特急列車にキューキュー詰めになるけど、何を探しに行くのかは忘れてしまってるんだよね。

160. — Et la poulie gémit comme gémit une vieille girouette quand le vent a longtemps dormi. — Tu entends, dit le petit prince, nous réveillons ce puits et il chante... / すると、車が、うめくようにひびきました。長いこと風に吹かれずにいる、古い風見のよりにギイときまりました。「ほら、この井戸が、目をさまして歌ってるよ...」(p.107)

→ すると、古びた風見鳥が久しぶりに風に吹かれてうめくように、滑車がうめきました。「聞こえた？ 僕たちがこの井戸の目をさましたんだ。歌ってるね...」

主語人称代名詞 *nous* を訳さないわけにはいかない。この作品にあっては、人と人、人との、あるいは動物との関係で、何より大切なのが「相手へ働きかけ」「*créer des liens*」や、「時間を惜しみにく使うこと」「*perdre du temps*」なのであるから。

161. *Je ne voulais pas qu'il fit un effort: — Laisse-moi faire, lui dis-je, c'est trop lourd pour toi. /* ぼくは、王子さまに骨をおらせたくなかったので、言いました。「ぼくが汲んであげるよ。きみには重すぎるから」(p.109)

→ 私は王子に無理をさせたくなかったので、言いました。[...]

162. *Dans mes oreilles durait le chant de la poulie et, dans l'eau qui tremblait encore, je voyais trembler le soleil. /* ぼくの耳には、車のカラカラいう音が、ずっとときこえているし、まだゆれている井戸水には、日の光が、キラキラとうつつっていました。

→ 私の耳には（まだ）滑車の歌が続いていました。そして、まだ揺れている水面に太陽が揺らめいて見えました。(p.109)

繰り返すが、内藤訳に見られる日本語表現へのこだわりは高く評価できる。

163. *Cette eau était bien autre chose pu'un aliment. Elle était née de la marche sous les étoiles, du chant de la poulie, de l'effort de mes bras. /* その水は、たべものとは、べつなものでした。星空の下を歩いたあとで、車がきしるのをききながら、ぼくの腕に力を入れて、汲みあげた水だったので。(p.109)

→ この水には、ただの食べ物や飲み物とはぜんぜん違う意味がありま

した。[...]

164. Elle était bonc bonne pour le coeur, comme un cadeau. / だか
らなにか贈り物でも受けるようにしみじみとうれしい水だったのです。
(p.109)

→ だから、プレゼントのように心にもおいしい水だったのです。

内藤訳は名訳と言っていいだろう。しかし、第24章に出てくる “Il me dit simplement: — L'eau peut aussi être bonne pour le coeur...” / ただ、こういったきりでした。「水は心にもいいものかもしれないな...」(p.104) とのつながりが忘れられている。

165. Lorsque j'étais petit garçon, la lumière de l'arbre de Noël, la musique de la messe de minuit, la douceur des sourires faisaient, ainsi, tout le rayonnement du cadeau de Noël que je recevais. / ぼくは、ほんの子供だったころ、ぼくのもらうクリスマスの贈り物も、クリスマスツリーにはロウソクが光っているし、真夜中のミサの音楽は聞こえるし、人たちが春のようになっこりしているしするので、いよいよきらきらと目に映りました。(p.109)

→ 幼い子供だったころ、クリスマス・プレゼントをもらうと、クリスマスツリーの明かりや真夜中のミサの音楽や優しい微笑みが重なって、（この水の場合と同じように）さらにプレゼントが輝いて見えたものでした。

内藤訳独自の理想追求は理解できるが... もう少しスッキリさせたい。

166. — Les hommes de chez toi, dit le petit prince, cultivent cinq mille roses dans un même jardin... et ils n'y trouvent pas ce qu'ils cherchent... / 「きみの住んでるとこの人たちったら、おなじ1つの庭で、バラの花を5千も作ってるけど... 自分たちがなにが欲しいの

か分からずにいるんだ / (p.109-110)

→ 「君のところの人間たちは、同じ庭で 5千本ものバラを栽培して
る... なのに、(そこでは)自分たちが探しているものを見つけきれない
ままなんだ...」 [...]

167. *J'avais bu. Je respirais bien. Le sable, au lever du jour, est couleur de miel. J'étais heureux aussi de cette couleur de miel. Pourquoi fallait-il que j'eusse de la peine... / ボクは水を飲んで
ホッとしました。夜明けの砂地は蜜のような色になるものです。ボクは
その蜜のような色をいい気持ちになって眺めていました。苦勞するわけ
なんかどこにもありませんでした。 (p.110)*

→ 私は水を飲み終えて、ホッと一息ついているところでした。[...]。
私はその蜂蜜のような色にも幸せを感じていました。辛い気分になる理
由はまるでありません...

これも馬の耳に念仏になるが、これは大過去・半過去で構成されたテキスト
であって、登場人物の動きによる「語り」の進行は存在しない(「第1部」引
用8のコメントを参照)。あくまでも、このときの「私」の状態が描写されてい
るのみである。もちろん、このような読みを語学の専門家以外に強要するつも
りはない。

168. — Il faut que tu tiennes ta promesse, me dit doucement le
petit prince, qui, de nouveau, *s'était assis* auprès de moi. //「きみ
は約束まもらなくちゃ」と、しずかに言った王子さまは、また、ぼくの
そばにきて腰をおろしていました。(p.110)

→ 「約束は守ってね」と王子が静かに言いました。いつの間にか、再び
私のそばに腰をおろしていました。

引用167にも見られたこの大過去形は、嘘野が“formes composées « invisibles »”と命名した複合形の一つである。「語り」を進行させたのは単純過去

dit であって、その動いた時点ではすでに「いつの間にか」大過去 *s'était assis* の結果だけがそこにあるということになる。この «invisibilité» は、芝居のト書きや映画のシナリオの中の複合過去に集中的に見られる現象で、その舞台上あるいはスクリーン上の場面においては、複合過去で示される動作が観客の目には止まらない現象を指す。もちろん、これは文法学者の理論であって、実践的翻訳としては内藤訳で一向にかまわない。

169. Et j'eus le coeur serré en la lui donnant: — Tu as des projets que j'ignore... / でも、それを王子さまにわたすとすると、胸がいっばいになりました。「きみは、いろんなことしようとしているんだ、ぼくの知らない...」(p.111)

→ 何か僕の知らない計画があるんだね...

王子の身に何かが起こりそうだという不安を出したいところだが、なかなか難しい。

170. — Tu sais, ma chute sur la terre... c'en sera demain l'anniversaire... / 「ね、ぼくは、この地球におりてきたる?... あしたは1年めの記念日なんだよ...」(p.111)

→ 「あのね、僕がこの地球に落ちてきて... ちょうど明日が1周年なんだ...」

171. — J'étais **tombé** tout près d'ici... / 「ぼく、ここのすぐ近くにおりてきたんだ...」(p.112)

→ 「落ちてきたのは(実は)ここからすぐ近くのところなんだ...」

大過去に注意。出来事の成立そのものを伝えるのではなく、その出来事が今再び発話時点と関係していることを示す。これも、翻訳で表すのは困難。

172. Tu **retournais** vers le point de ta chute? / きみは、おりてきたと

ころへ、また行きかけていたんだね？ (p.112)

→ (あのとき,) 君は落ちた場所に戻るところだったんだね？

「途中であったことを示す」半過去。

173. On **risque** de pleurer un peu si l'on s'est laissé apprivoiser. / 仲のよい相手ができると、人はなにかしら泣きたくなるのかもしれない。 (p.113)

→ なついてしまうと、いずれは少し涙を流すことになる恐れもあります。

第26章：『私と王子の物語』“1周年”（単純過去）

174. Et je l'entendis qui parlait: — Tu ne t'en souviens donc pas? disait-il. Ce n'est pas tout à fait ici ! / すると、こう言っている王子さまの声がきこえました。「じゃあ、おぼえていないのかい？ どうもここじゃなさそうだよ」 (p.114)

→ [...]「なんだ、覚えてないのか？ 正確な場所は、ここじゃないよ」

175. Une autre voix lui répondit sans doute, puisqu'il répliqua: — Si ! Si ! c'est bien le jour, mais ce n'est pas ici l'endroit... / ほかの声、きつとどこかで、答えたのでしょ。王子さまが、すぐこういったのですから。「そうだよ、そうだよ！ きょうだったんだよ。だけど、場所はここじゃないんだ」 (p.114)

→ [...] 王子がこう言い返したのですから。「いや、そうなんだ！ 日付は今日でいいんだ。でも、場所が違う」

176. — ... Bien sûr. Tu verras où commence ma trace dans le sable. Tu n'as qu'à m'y attendre. J'y serai cette nuit. / 「... その通りだよ。砂の中のボクの足跡がどこで始まっているか、見ておくれ。ボクを

そこで待ってさえすればいいんだ。今夜そこへ行くんだから」
(p.114)

→ 「…もちろんさ。砂の上の僕の足跡がどこから始まっているか分かるはずだ。(だから) そこで待っていてくれればいい。僕が今夜そこへ行くから」

177. Le petit prince dit encore, après un silence: — Tu as du bon venin? Tu es sûr de ne pas me faire souffrir longtemps? / 王子さまは、しばらくだまっていたあとで、また言いました。「君、いい毒もってるね。きっと、ボク、長いこと苦しまなくてもいいんだね？」
(p.114-115)

→ 王子は、しばらく黙ってから、こうも言いました。「君、いい毒もってるんだろうね？ 本当に、僕が長く苦しむようなことにはならないよね？」

encore については引用111, 153のコメントを参照。

178. Alors j'abaissai moi-même les yeux vers le pied du mur, et je fis un bond ! / そのとき、ぼくはぼくで、石垣のねもとのほうを見おろして、ハッと飛びあがりました。(p.116)

→ そのとき、私も石垣の下を見て、(ハッとして) 突進しました。

ここで「飛び上がって」はいけない。

179. — Quelle est cette histoire-là ! Tu parles maintenant avec les serpents ! / 「いったい、どうしたっていうのかい? 今度はヘビと話をするなんて!」(p.116)

→ 「今の話は、いったい、何なんだ? 今度はヘビなんかと話をしているのか!」

180. Et maintenant je n'osais plus rien lui demander. Il me regarda gravement et m'entoura le cou de ses bras. / ことがこうなっては、ぼくは、もう、王子さまに、なんにもきく勇気がありません。まじめな顔で、ぼくを見つめていた王子さまは、両腕を、ぼくの首にからませました。(p.116)

→ 私はもう不安でたまらず、質問する勇気も出ませんでした。王子は重々しく(?)私を見つめ、私の首に両腕をからませました。

181. Je le serrais dans les bras comme un petit enfant, et cependant il me semblait qu'il coulait verticalement dans un abîme sans que je pusse rien pour le retenir... / で、ボクは赤ん坊でも抱くようにしっかりと抱き締めましたが、王子さまの身体はどこかの深い淵に真っ逆さまに落ちて行って、引きとめるにも引きとめられないような気がしました... (p.117)

→ 私は幼い子供を抱くようにしっかりと抱き締めました。しかし、王子は深い淵に真っ直ぐずると引き込まれていくようで、私が何をしても引き止められそうにありませんでした...

182. Il avait le regard sérieux, perdu très loin: — J'ai ton mouton. Et j'ai la caisse pour le mouton. Et j'ai la muselière... / 王子さまは遠いところで迷子にでもなったように、きっとした目をしていました。「ぼく、きみがかいてくれたヒツジも持ってる。ヒツジをいれる箱も持ってる。それから口輪も...」(p.117)

→ 王子は真剣な眼差しで、届かないほどはるか遠くを見つめていました。[...]

さすがに、この場合の perdu に「迷子」はないだろう。

183. — Petit bonhomme, tu as eu peur... / Il avait eu peur, bien sûr ! Mais il rit doucement: / 「ぼっちゃん、君、恐かったんだね...」

王子さまは恐かったのです。それに間違いはありません。けれど、王子さまは静かに笑っています。(p.118)

→ 「(さっきは、ずいぶん) 怖い目にあっただね …」 / そう、もちろん、王子は怖い思いをしたのでした。なのに、優しく笑っているのです。

184. Et je compris que je ne supportais pas l'idée de ne plus jamais entendre ce rire. / 王子さまのあの笑い声が、もう、二度とは聞かれなくなるのだ、 と思うことさえ辛抱できないことが分かりました。 (p.118)

→ (このとき) 私には分かったのです、王子のこの笑い声をもう2度と耳にすることがない、そう思うだけで耐えきれないということが。

185. — Petit bonhomme, n'est-ce pas que c'est un mauvais rêve cette histoire de serpent et de rendez-vous et d'étoile... / 「ぼっちゃん、そりゃ、ありもしないこと言ってるんじゃないのかい、ヘビだの、待ち合わせる場所だの、星だのっていう、その話…？ ね、そうだろ…」 (p.118)

→ 「ねえ、君、その話、悪い夢なんだよね、ヘビだとか、待ち合わせだとか、星だとかって…？」

186. Si tu aimes une fleur qui se trouve dans une étoile, c'est doux, la nuit, de regarder le ciel. Toutes les étoiles sont fleuries. / もし、君がどこかの星にある花が好きだったら、夜、空を見上げる楽しささたらないよ。 どの星も、みんな花でいっぱいだからねえ (p.119)

→ どこかの星にある花が好きになったら、夜、空を眺めるとき、気分爽快だよ。空じゅうの星がみんな花開いたようなものだからね。

187. — Ah ! petit bonhomme, petit bonhomme, j'aime entendre ce rire ! — Justement ce sera mon cadeau... ce sera comme pour

l'eau... /「ぼっちゃん，ぼっちゃん，ぼく，その笑い声をきくのがすきだ」「これがボクの今言った贈り物さ。僕たちが水を飲んだときとおんなじだろう」(p.119-120)

→ 「でも，あのね，僕は君のその笑い声を聞くのが好きなんだ！」「それぞれ，この笑い声が僕の贈り物なんだ。この笑いはね，水と同じ働きをすることになるんだ...」

189. Tu auras, toi, des étoiles qui savent rire ! /「すると，君だけが笑い上戸の星を見るわけさ」(p.120)

→ 「君がね，手に入れるのは，笑うことができる星たちってわけ！」

190. — Et quand tu seras consolé (on se console toujours) tu seras content de m'avoir connu. /「それに，君は今に悲しくなくなったら — 悲しいことなんかいつまでも続きゃしないけどね — ボクと知り合いになってよかったと思うよ。

→ 「そして，君が悲しみを乗り越えたら — 悲しみは必ず乗り越えられるからね — 僕と知り合ってよかったと思うはずだよ。(p.120)

191. Et tu ouvriras parfois ta fenêtre, comme ça, pour le plaisir...

Et tes amis seront bien étonnés de te voir rire en regardant le ciel. / そして，たまには，そう，こんなふうに，部屋の窓を開けて，ああ，うれしい，と思うこともあるよ... そしたら，君の友達は，君が空を見上げながら笑っているのを見て，びっくりするだろうね。(p.120)

→ そして，時には，なんとなくふと窓を開けて，(星空を)楽しんだりするんだ... [...]

誰もが知っている comme ça など意外にくせ者かもしれない。馬鹿の一つ覚えみたいに「こんなふうに」と言っていると，そのうちに痛い目に遭う。

192. — Je ne te quitterai pas. — J'aurai l'air d'avoir mal... j'aurai

un peu l'air de mourir. C'est comme ça. / 「ぼく、きみのそば、はなれないよ」「ボク、病気になるって顔しそうだよ...。なんだか生きてないような顔しそうだよ。うん、そうなんだ。(p.121)

→ [...]「僕、痛そうにするだろうな...。ちょっと死んでしまいそうな感じになると思うよ。それはしかたのないことなんだ。

193. — Je te dis ça... c'est à cause aussi du serpent. Il ne faut pas qu'il te morde... Les serpents, c'est méchant. Ça peut mordre pour le plaisir. / 「ボク、こんなこと言うの...。ヘビのこともあるからだよ。君にかみついいちいけいからさ...。ヘビのやつ、意地悪なんだから。面白がって、かみつくかもしれないんだよ...」(p.121)

→ 「僕がこんなこと言うのは... あのヘビのこともあるからだよ。君が噛みつかれたら困るもの... ヘビってというのは意地悪なんだ。遊び半分で噛みつきかねない...」

できれば、「認知フレーム内の唯一性」(＝登場人物としてのヘビ)を表す単数定名詞句と「総称」(ヘビ一般)を表す複数定名詞句の違いが明確になるよう訳したい。

194. — C'est là. Laisse-moi faire un pas tout seul. / Et il s'assit parce qu'il avait peur. / 「だからね、かまわずボクを1人で行かせてね」と言って、王子さまは腰を下ろしました。恐かったからです。(p.125)

→ 「ここだよ。僕だけが1歩踏み出すからね、君は動いちゃだめだよ」そう言いながらも、王子は座り込んでしまいました。恐かったからです。

Laisse-moi faire un pas tout seul. は、できるかぎり原意を汲んで訳したい。いずれにしても、覚悟ができていないはずの王子も、恐怖に足がすくむ、このような第26章の緊張感を出すのが翻訳者に要求される資質であろう。その

点，内藤訳はやや物足りない。

195. Il hésita encore un peu, puis il se releva. Il fit un pas. Moi je ne pouvais pas bouger. / 王子さまは，まだ，なにか，もじもじしていましたが，やがて立ちあがりました。そして，ひとあし，歩きました。ぼくは動けませんでした。(p.125)

→ (言い終わってから) 王子はさらに少しためらい，それから立ち上がり... 1歩を踏み出しました。私はといえば，身動きできないままでした。

この死の一瞬前の逡巡を「まだ，なにか，もじもじしていました」はなからう。嘘野が拙稿を「我，弾劾す」と題したゆえんである。

エピローグ

第27章：『聞き手への呼びかけ』“6年後”（現在形，複合過去）

196. Et maintenant, bien sûr, ça fait six ans déjà... Je n'ai jamais encore raconté cette histoire. / さて，今となってみると，もう，確かに6年前のことです... 僕は，この話をまだ誰にも話したことがありません。(p.125)

→ で，今では，もちろん，すでに6年がたってしまった... 今まで僕は一度もこの話をしたことがない。

197. Maintenant je me suis un peu consolé. C'est-à-dire... pas tout à fait. Mais je sais bien qu'il est revenu à sa planète, car, au lever du jour, je n'ai pas retrouvé son corps. / 今となっては，悲しいには悲しいのですが，いくらかあきらめがつきました。と言ったところで... すっかりあきらめがついたというわけではありません。でも，王子様が自分の星に帰ったことはよく知っています。なぜなら，夜が明けたとき，どこにもあの身体が見つからなかったからです。(p.127)

→ 今では悲しみを少しは乗りこえた、というか、つまり... まだまだなんだけどね。でも、ちゃんと分かってる、王子が自分の星に帰ったという事は。だって、夜明けになったら王子の身体が見あたらなかったからね。

se consoler については引用190を参照。訳語として「あきらめる」は避けたい。

198. Mais voilà qu'il se passe quelque chose d'extraordinaire. / ところで、どうでしょう。こんな大変なことがあるのです。 (p.127)

→ それが実は、とんでもないことが起きてるんだ。

199. C'est là un bien grand mystère. Pour vous qui aimez aussi le petit prince, comme pour moi, rien de l'univers n'est semblable si quelque part, on ne sait où, un mouton que nous ne connaissons pas a, oui ou non, mangé une rose... / まったく不思議なことなのです。あの王子様を愛しているあなたがたと、僕にとっては、僕たちの知らないどこかのヒツジが、どこかに咲いているバラの花を食べたか食べなかったかで、この世界にあるものが何もかも違ってしまいます... (p.128)

→ これは(=ヒツジが花を食べたのかどうかという問題) 実に大きな謎なんだ。だって、僕と同じように君たちだって王子が好きだよ。そんな僕たちにとって、この宇宙の様子がまるっきり違ってしまいうんだけれど、どこか僕たちの知らないところで、僕たちの知らないヒツジが、バラを食べたか食べなかったかで...

神秘的な解釈をこよなく愛する日本人は、「そして、空の星がみな、さも楽しそうに笑うのです (Et toutes les étoiles rient doucement)」とか、「そうになると、鈴がみんな涙になってしまうのです! (Alors les grelots se changent tous en larmes !)」とか、「この世界にあるものが何もかも違ってしま

のです (rien de l'univers n'est semblable)」とか言われると、すべての理性を失うようである。

しかし、考えてもみよう：助かったと思ったら「空の星がみな、さも楽しそうに笑う」ように見えるのはごく自然なことではないか。逆に、本当に大切なものが亡くなったと思ったら「鈴がみんな涙になる」ことに何の不思議もないだろう。だとすれば、結果がいずれかになるに従い、「この世界にあるものが何もかも違ってしまう」のもまた、不思議でも何でもないのである。

200. Si alors un enfant vient à vous, s'il rit, s'il a des cheveux d'or, s'il ne répond pas quand on l'interroge, vous devinerez bien qui il est. Alors soyez gentils ! Ne me laissez pas tellement triste: écrivez-moi vite qu'il est revenu. / そのとき、子供があなたがたのそばに来て、笑って、金色の髪をしていて、何を聞いても黙りこくっているようでしたら、あなたがたは、ああ、この人だな、と、確かにお察しがつくでしょう。そうしたら、どうぞ、こんな悲しみに沈んでいる僕を慰めてください。王子様が戻ってきた、と、一刻も早く手紙を書いてください... (p.131)

→ [...] こっちからの質問には答えてくれない子だったら、それが誰だか分かるよね。そしたら、お願いだから、僕をこんなに寂しい気持ちのままにしておかないで、すぐに知らせて欲しい、「王子が戻ってきたよ」って！

最後に視野狭窄の症例で締めくくるのはなんとも残念なことだが、作品をごくふつうに読んだとしても、王子が「黙りこくっている」少年だとは考えないであろう。それどころか、時には極めて饒舌でさえある。しかし、目の前の il ne répond pas をどう訳そうかと考えているうちに全体的な見通しがすっぱり抜け落ちてしまう。なにやら凡百の論文にも見られそうな、その場限りの自分に都合のよい材料ばかりを並べ立てる態度に通じるものがありそうだ。嘘野も自らを省みて、視野狭窄には気をつけようと心に刻み込んだことであった。しかし...Et aucune grande personne ne comprendra jamais que ça

a tellement d'importance ! / [でも], 大人たちは誰ひとりとして, [以上書いてきたこと] がそんなに大事なことだとは決して分かりっこないでしょう。
(p.129)